

昭和三十四年度

宮城県伊具郡における方言語いの分布と
生活言語上の地域的変動の状況について

宮城県角田女子高等学校郵便友の会

目次

一、当研究の動機

二、経過

三、調査分野と区域の設定

四、調査項目の設定

五、現地調査の基準と実際

六、地方語調査書

七、加藤正信先生よりの指導助言

八、地方語の分布状況（伊具郡方言地図）とその解釈

九、結語

一〇、評語（加藤正信氏）

一、方言調査研究の動機

この方言調査を雨田女子高校郵便友の会が掌っているところに疑問を抱かざるを得ない。当友の会の在り方は文通をもつて、行うことに主眼があることは誰しも否定しえないところであるが、そこには學びの道にあるものとして、何ものかを學びうる手段として、当友の会を利用することこそ学校生活活動にその意味が伺えるものではなからうか。

かゝる点より何か計画的系統的にして學習の面に効果的ながらも現実の社会に根ざした上に興味をそゝるものを郵便文通という手段でその目的を果せるものはないだらうかと考えた結果、当方言調査にその意義を見出したのがこの動機だといえよう。

本校卒業生特に県外就職者の経験談によつても話し言葉にその労力を少なからず費しているとの事実がらあしてゐて、郷土の言葉を客観的に系統的に知つておくことこそこの面で役立つことであらうし、当調査の意義は否定しえないところであらう。

当調査研究に当り東北大学大学院文学研究科加藤正信氏の御懇切な御指導御助力を受け、同研究科兼本校講師宮川康雄先生の御援助に対しても友の会員と共に深甚なる敬意と感謝を申し上げさせていたゞきたい。

二、経過

昭和三十四年五月初旬

全 右 雨田女子高校郵便友の会活動開始
伊賀郡内の方言調査の実施を決定

全 右 五月中旬
東北大学大学院文学研究科加藤正信氏より調査対象、その範囲及調査の方法等の指導をうける

全 右 六月一日

全校生徒に対し「言葉の調査」と題して、入学当初、他地域の特にめずらしいと感じた言葉に關するアンケートをとる。

全 右 六月十日

右で得られた言葉の中伊賀郡内での地域差の著しい言葉を選ぶために部分抽出法により各通学地区より二名乃至三名ずつを選びその言葉を選定する。(調査対象となる言数百二十一送付)

全 右 六月三十日

当友の会の研究方針を加藤先生へ郵便で連絡したところ「言語生活」を中心とす

研究の指針を受けた。

昭和三十四年七月一日

全石 七月四日

各地区毎の一覽表作成
加藤先生に御来館を迎ぎ本校被服室で当調査の意義方法それに対する心構えから調査の実際の練習に至るまで友の会員指導をうける（出席者数三十四名）

全石 七月七日

調査対象となる語を五十八にしほりそれらの説明文を添削補充等地方語調査書作成のための指導をうく

全石 七月八日

地方語調査書原案作成完了
被調査者の検討、送定を行う。又調査地奥の設定

全石 七月九日

実際の調査時における模擬実験を行う
地方語調査書案の検討と今後の予定を加藤先生へ連絡その指導をうく

全石 七月十五日

地方語調査書、調査用略図、白地図等作成完了

全石 七月二十日

七月末より八月始めにかけての夏休み中生徒個人が各自希望する地域の偏地調査を行う

全石 九月十士月

調査書の結果により分布地図の作成に当る
友の会員代表八名、顧問一名と共に分布地図の修正及びその解釈検討に関する指導をうけるために東北大学文学部国文学研究室を訪ね加藤先生の指導をうける。

昭和三十五年二月五日

加藤正信先生より解釈、検討するための分布地図作成のための指導それによる解釈の方法に関する指導をうく、資料項目を二十二と決定

全石 二月十五日

右の資料の解釈、検討を終る
印刷、製本を終る

全石 二月十五日

三、調査分野とその区域の設定

地方語の研究はその目的に従つてこれを方言の研究と俚言の研究との二つに分ける。

方言の研究とは一地方言語社会の言語体系の記述と説明とをその目的とする。例へばその方言を音韻・

語法・語彙に亘つてその組織・構造を記述しこの方言の成立を立証し進んで国語内に占むべきその位

置を論定するが如きは方言の研究である（東條操方言概説による）と定べられてあるように方言研究

には音韻語法、語彙の三分野から総合的にすゝめてゆくべきであるが調査上の各分野の難易、仙南地方はアクセント、イントネーションの区別、変化がないという既定の資料から高校生として果し得る語彙関係部門に研究対象を限ることとした。

又分野を語彙関係部門に限るとしても無制限な地域を調査対象と定めるわけにもゆかず調査者が本校生徒である限り最も身近に接せられる地域つまり伊具郡内の地域に限定することとした。かくすることによつて、研究する興味と意欲をそゝると共に自己の生活を言語の上から再認識することになろう。

四、調査項目の設定

以上の分野区域を調査するに当り無数の語を無計画に実施するわけにもゆかず結論を見出すための調査言語の既定の資料もないので、調査項目設定のための予備調査を行うことにした。

特に広い地域の言語上の差を見出すならいざしらず、伊具郡という狭い地域にその地理的差異の漸しい語が存在しうるものか、又それによつて言語的境界線或は等語線なるものが引かれるものか。当調査の最も懸念された問題であつた。

(4) 予備調査

当調査の理想的な方法としては現地調査に準じ実地検分して決定すべきは当然だが本校生徒の通学地区毎に選定し（別紙の如く）例之ば入学当初地域の或は出身中学校毎に最も抵抗を感じながら話し合つた語を全生徒にアンケートをとり、これらを調査にふさわしい語に統整するため各通学地区毎二名ずつ部分抽出方法に従がい、特に狭い地域に於ける言語上の差異のある語百二十一語にしぼることができた。

尚、それらを實際的実用的な立場から加藤正信先生より検討してもらうに五十八語にしぼり、本年度本調査の項目とした。

【言葉の調査】 年 組 通学地区 出身中学校 46

I あなたはどこで育てられましたか。

① 現在のところで ② 他 の 場所へ ③ より移り現在の所で

才 年生

II 他 の 場所より移転した人は何才で何年生の時ですか。

III あなたは高校一年に入学した当初自分達が話していた言葉に対して他の中学校より入学した友達が

話している言葉が違っていたり或いは珍らしい言葉だと感じた言葉はありませんか。もしありましたら出来るだけ多く思い出し記入して下さい。

又その人がどこの中学校出身かわかっていたらばその言葉の隣に（ ）としてその中学校名を記入して下さい。

Ⅱ あなたの部落で話されている言葉で他の部落と着じるしく違っていたり或いはあなたの部落だけで話されている言葉はありますか。ありましたら全部記入して下さい

Ⅲ 次の条件にあてはまる人があなたの部落にありましたら、その人の姓名と住所を記入して下さい
① 男性である ② 六十才以上又は四十才以下の大人 ③ 生れてから満十五才まではその土地（他の市町村及びその字）で生活したことのない人 ④ それ以後ずっと生活したとしてもその期間が三ヶ年までの人（勿論兵隊生活もよその生活にはいります。）

姓名

住所

六十才以上の入

四十才以下の入

（ロ）地方語調査書の作成

この調査書は右に述べたように調査項目は五十八から成り立っているが、抽象名詞等のような高麗な概念をもつもの、複雑多岐にわたる内容の言葉はできるだけ高校生として調査整理のしやすい普通名詞とか単純な動作をあらわす動詞、及び形容しやすい簡単な形容詞等を主に採用した。なほ、調査項目の排列も意味の関連のあるものを一つづけて調査できるように心がけた。そうすることにより調査の際に被調査者に抵抗を感じることなく答えてもらえるからである。

Ⅲ 現地調査の基準と実際

実際問題として狭い地域のうち言語的差異の漸しい語を引出さなければ当調査の主旨にふさわしい語に必要にして充分な調査上の説明がなされたとしてもそれは机上の空論に終ること必至なことである。

それがために言語の地理的分布を實際に調査するがためには次の表が当主旨に合うべく的確な手続を必要とするものである。

（一）調査地 表 （二）被調査者 （三）調査すべき言語の規定とその傾向方法 （四）調査状況 （五）記録方法 （六）言語の地理的分布図の作成 （七）その解釈、検討などなるべく一定にして地理的

境の差異と記録された言語現象との相関係を考察するところに本旨がある。

（一）調査地 表は理想からみると言語の地方的差異の漸しいところからその地 表を設定すべきであらうが、

本校の実態又学校へ小又は中学校を示す。毎に地方的差異が認められるという資料もみられる。觀矣。より郡内の中学校特に各部落毎に区分し実施した。しかし、一部落でも地域的に差異がみられると思われ、上掲の如き場合は更にその地奥を増した。

(二) 被調査は女性に限り生れてから今日までの土地特にその部落だけを生活根據地として生活してきたものか或は他の部落へ転住したことがあるとしてもその期間が三年以内でしかかゝる二十才までの他の部落地域で生活したことのないものを必須の条件として、他の市町村より結婚等で転住してきたものは一切取り扱わないこととした。又旧高等女学校、新制高等学校以上の教育をうけたものも同様に調査対象ともしなかつた。

このような條件に更に六十才以上・三十才より五十才・二十才以下の三階層にわけ被調査者を区分けして実施した。

「伊興郡内の方言研究のための調査者調書」

次の條件に合う人が賣女の地区にありましたら当調査の主旨をその方々に連絡、了承を得てこの調書に記入捺印してもらつて下さい。

市町村名

字名

1. 六十才以上の女性

氏名印

年令

住所

2. 三十才より五十才の女性

氏名印

年令

住所

3. 二十才以下の女性

氏名印

年令

住所

條件

1. この調査書の字名のところで生をうけ育てられ今日にきている女性であること。

2. 又他の部落へ行き生活したことがあるとしてもその期間が三年以内でしかかゝる二十才までの他の部落で生活したことのないもの

3. 他の市町村より転住へ例へば結婚などをしてきた女性は、この調査対象にはなりません。

4. 又旧高等女学校以上の教育をうけた女性もこの調査対象になりません。

宮城県角田女子高等学校 教諭 鈴木 幸三

(三) 調査すべき言語の規定とその奥向方法

調査項目の設定の項で述べたように五十八項目の言葉に対し、被調査者に対し同一事物（或は概念）を連想させるために言語によつて表わされるべき意味内容を或る一定のかなり狭いものに規定し、その意味の切り取り方を定めるだけ似たものにするために「地方言調査書」の如く一定の文章、身振り、絵などによつて説明し、それを表わす言語形式を求めた。しかし被調査者個人共年令、環境や体格を異にしている以上その意味内容の受け取り方も各様であることはやぶやえなものであるがそれにも増して、当調査の実地に關して全くの素人として各人が各地実を分担的に調査するよりむしろ調査する生徒の個人差のあつたこともゆがめない事実である。

これら個人差を防ぐ意味においても調査者としての高校生に無理にならないう程度に言語が規定され、奥向方法の簡單化されなければならぬ。こゝに於て「意味内容の規定を長い説明文によつて嚴密にすることよりもむしろ幾つかの例文を用意してそのような文中において使用されるか否かという用ゑを調査した方が實際的眞つ科学的である」という御指導を痛感せざるを得ない。

四 調査状況

現地調査は昭和三十四年七月、八月の夏期休暇を利用して行つた。調査者の分担は結果的には調査者自身の通学出身地区或はその周辺となつたが、飽くまでも希望する地奥にゆくことを原則として希望地のなかつた地奥には八月五日に特定の生徒と各グループに分れ調査した。勿論調査者は被調査者と面持の上調査を行つたが調査態度は各人名地共同様条軒になるように心がけたが全くの未経験と地域によつては不慣れな現地出張、又人間対人間の關係である以上その状況は全くの同一であつたといふ難かつた。

調査地奥と調査者氏名

東根（平島）	北村多美子	佐藤ひろし	藤尾（藤田・金津）舟山哲子・角條淑子
北郷（君萱）	菅野ミヅ子	舟山 敬子	櫻（佐倉）上巻と同レ
西根（高倉）	南條 淑子		
角田（南町）	小野寺洋子	曲水 勝子	
館岡（新町）	小野 昭子	大寺由利子	表廻 淑子

大張（大藏川前）	天野トシ子、半沢聰子	小野寺洋子、佐藤 晶子、鈴木 幸三、
耕野（大和沢）	大張（大藏川前）と同じ	
丸森（丸森）	山家とよ子、星 吉子、	
筆甫（平館）	今野 優子、鈴木友子、	
大内（山屋敷）	高野せつ子、	
金山（金山）	山家とよ子、星 吉子、	
小荷（麓）	金子紀久子、鈴木友子、	
枝野（畑中石川口）	大江幸子、今野優子、	泉 ふじ子

(五) 記録方法

被調査者自身が直接話す言葉だけを採録した。若しも地方語として一つのみならず他にいくつある場合にはその地方で使用頻度の多いものより記載しそれら全部を記しておくこととした。その記載方法に關しては万国共通発音符号の運用が望ましいが不可能なので曰本語の假名又はひらがなで以つてその音を忠実につかまえ記載することに統一した。特に「り」の音は例えは「^{ga}」の場合は「^{ga}」又は「^{ga}」とすることに注意した。

(六) 方言分布地図の作成

加藤正信先生の指導により調査用語の一項目ごと、一枚に十代、三十代、五十代の三グループにわけ年代別の言葉を見易くすると共に調査する際の発音やその聞きとり方の個人差のため着しい違いの感じられぬい微妙な発音や意味をもつた語は同じものとして扱い区別しなかつた。尚、分布地図の凡例に示した如くその言葉を符号で区別できたことはその実態を把握させるのに容易であつた。

伊具郡方言地図 (角田女子高)

調査項目番号

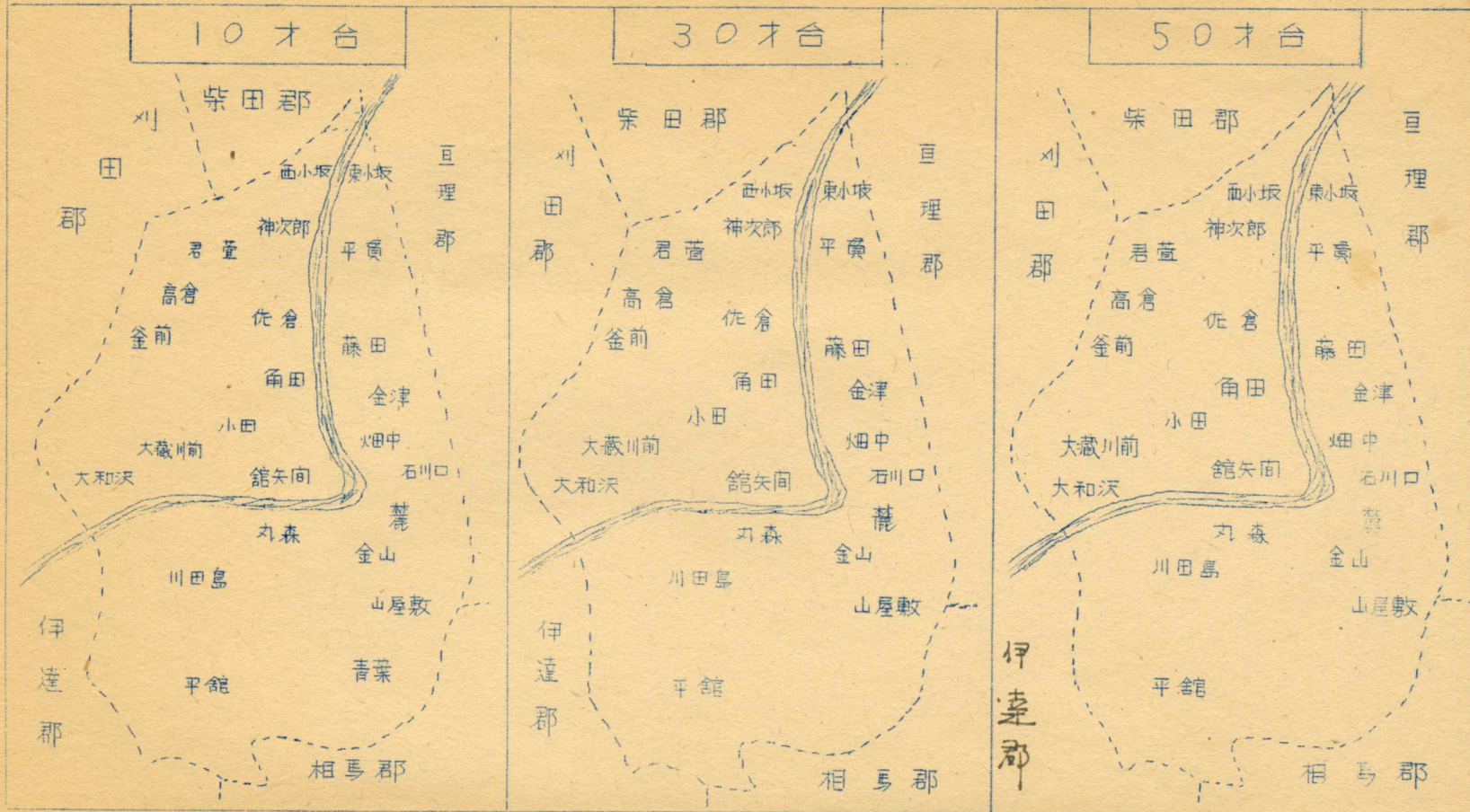
共通語形

凡例

10才台

30才台

50才台



調査者番号	調査者氏名	調査地奥番号
(フリガナ)..... 調査地奥		
調査地奥の主な産業		調査した場所
調査の日時 1959年 月 日		

被調査者氏名		生年
現住所		
職業		
経歴	<p>◎お生まれはここ(この町・村・部落)ですか。</p> <p>◎小学校はここ(この町・村・部落)ですか。</p> <p>◎学校を卒業してから、ずっと今のお仕事ですか。(職歴を聞く)</p> <p>◎よその土地で生活なさった経<small>人</small>はありますか (どこでいつのとき)</p>	
父の出身地		
母の出身地		

備考 (調査地奥の概観・被調査者の特徴・調査の印象など)

1. (P) これを何んといいますか。ものを取るものです me
2. (P) 目の上の方にあります。こゝをぬいとか。せまいとか云う時があります。こゝを何んといいますか。ゴーンと。
3. (P) これを何んといいますか。これを開かないと食べものが食べられません。又おの人がこゝに紅をつけることがあります。又ゴーンと。
4. (P) その下に丸いがとがつている（実際に指さして）ものがあります。これを何んといいますか。お。
5. (P) このへんを何んといいますか。（これをつかわないと頭を左右にまわすことはできません。又この手のこのへんのことを何んといいますか。（局部をさして）ゴーンと。
6. (P) われわれの手足や頭（実際に手で示して）の全部。お。
7. (P) 赤坊がく「ク」から水のようなものをたらしめていることがあります。その水のようなものを何んといいますか。お。
8. 切手をはるときべろつとぬめることがあります。そのときつける水のようなものを何んといいますか。（指先に少しつけてみせて）これを何んといいますか。お。
9. 切手をはる時口より出てくるやわらかく丸形のを何んといいますか。お。
10. (P) （絵をみせて）これに見られるのは年頃は十才位ですが何んといいますか。お。
11. (P) 色白で人によつては目に入れても痛くなくその木杓あたりをなめてみたくなるような赤ん坊をみてお年寄り。は何んというでしょうか。お。
12. 色白で目がぱつちりとした赤坊のことを云う時はメンコイといいます。それでは十才位の女で色が白くぱつちりとした人をみ何んといいますか。お。
13. その反対の顔つきをあの人はい。……の女だと云いますか。お。
14. 両親に死なれ、他人の家で育てられてる子が気持ちよくとりあつかわれぬ場合その子は……だと思ひますか。お。
15. 子供や大人のような食べものによつて食欲をみたしているのではなく、お母さんのすきすきのんでオギャオギャとなく子供をなんといいますか。お。
16. (P) おその家へ行って出されたお菓子やペロペロ食べたり、誰とでもよくしゃべり、人の悪口を平

18. 氣でゆつたりするやうな人をどうゆうう人だと言いますか、
時に雨が降つてゐる時に何のする用もなく、友も遊びに来ないで部屋に一人

時に雨が降つてゐる時に何のする用もなく、友も遊びに来ないで部屋に一人ゐる時、アァー何
何だといふますが、ヤムーストヤム

何だといふますか、サルスと云ふ
あるたがおもしい本を講んでいる時

あなたがおもしろい本を読んでいる時家のもの（例へば十才の子）がうるさい程に本を読又はじめた時せつかくの面白い本がわからなくなる場合があります。これは *bookworm* のせいだと言いますか。 *bookworm* ですか！

20、
ますか。 No of course not
私をうしろにたくしエニビ

私たちはノートにかく時エンピツの先をくけずりますが長い時間~~使~~使っているとそのエンピツが太くかけるようになります、これはエンピツがすりへりーになったといひます。

ツが太くかけるようになります。これはエンピツがすりへりー！になったといひますか
S a k - g a m a y u i

21 普通ニヤツは拍目を内例に着すが汗でぬれたためその拍り目を外にして着るのさー！にきる

とていすか
URAGESI

22. ごはんをたいて焦げついた時どんな「におい」がするといえますか？
スロウ・スライス

23 (P) 田植をする前田の土をならすため馬の世に使われる動物があります。又乳をしぼるためにかつ

てゐる物もありますがそれらを合せてなんといふですが、
ふい

24. 春の田に水をひいたり田植時期になると「エロゲエロとなくのかきこえますが、あれを何とい

くまをか。
K 2017

25.(P) 普通のカエルよりもつと大きいカエルで背中にブツブツのあるもの。そしてそのそと歩

夕方や雨の時出て来て蚊などをとったりしますが、そうゆうのをなんといいますか。mosquito

26. (P) かえるの子供ですが水の中で生活し頭が丸くしつぽだけが見えるのを何といいますか。 (0.25点)

azyakusi

27(p) これは何といひますか。長さは五寸ぐらひなたの土の上をちよろちよろ走りまわります。色

はこころあたりでは美と茶のまじつた色をしながら見られます。その處はきぬやすくきつてし

まつてもその屋はうごいています。水の中には入りません。これをなんといいますか。トウズメ

これは何んといひますか。春から夏にかけて野や山でひうひうとんでいるのがみられます。色

は主に白ですが、茶、黄などがあり、この話をきくと茶の花を思い出させます。

こうゆう虫をなんといいますか。前足が草をかるかまに似ています。おこるとそれをふりたつ

- 46 (P) 冬の寒い日に空から白いものが、ちらちら降ってきます。何が降るといいますか。 (トニー)
- 47 水気のあるもの。たとへば濡れた手拭などが寒さのためにかちかちになることがあります。こ
うなることをどうなるといいますか。 (スティーヴ)
- 48 (P) やはり冬のことですが軒先などにさがる「コオリ」の棒です。これを何んといいますか。 (Toby)
- 49 本当は人のものを盗んだのにその子がいや俺は「盗まない」といいました。その子は何んとい
ったことになりましたか。本当の反対です。 (トニー)
- 50 あなたと同じ位の人に対して夕方から夜にかけて、別れの挨拶はなんといっていますか。 (Sally)
- 51 夜道路などで相手があなたと同じ位の人に会った時その挨拶はなんといっていますか。又目上の人
に対してはどうですか。更に他人の家を夜訪問した隣親しくしているあなたと同格の家の場合
ふだん行き来しない目上の家の場合各何んといっていますか。 (トニー)
- 52 慮でない子供はみつからないうようにあちこちにかくれる。みつかった子供は次第に慮になる。
そんな遊びのことを何んといいますか。 (トニー)
- 53 (P) ひとりの子供が鬼になつてほかの子供たちを追いかける鬼につかまつた子供が代つて鬼になる
そんな遊びのことを何んといいますか。 (トニー)
- 54 小さな子供たちがゴザ等をしいてお父さんになつてみたりお母さんに或は子供になつてみたり
して遊ぶ遊びのことを何んといいますか。
- 55 主に子供の遊びなのですが小石位の全く丸いものでガラス製です色はいろいろありまして、自分
のもので他のものにぶつけければ自分のものである遊びものです。 (トニー)
- 56 女の子の遊びものです小石位の大きさで平らかで丸形になつています。それを地面でとか特に
セメントの上で親指や人指しめひではじいて遊ぶものです。 (トニー)
- 57 (P) 女の子の遊びものです。あぶきや小石などを入水てありますがこの遊びものを何んとい
いますか。 (トニー)
- 58 (P) 寒い冬にしかも風を利用して子供たちが野原でヒモをつけて空高く上げて楽しんであります。
形は色々ありますが四角形をしてあります。この遊びものを何んといっていますか。 (トニー)
- 但し (P) : 略図使用

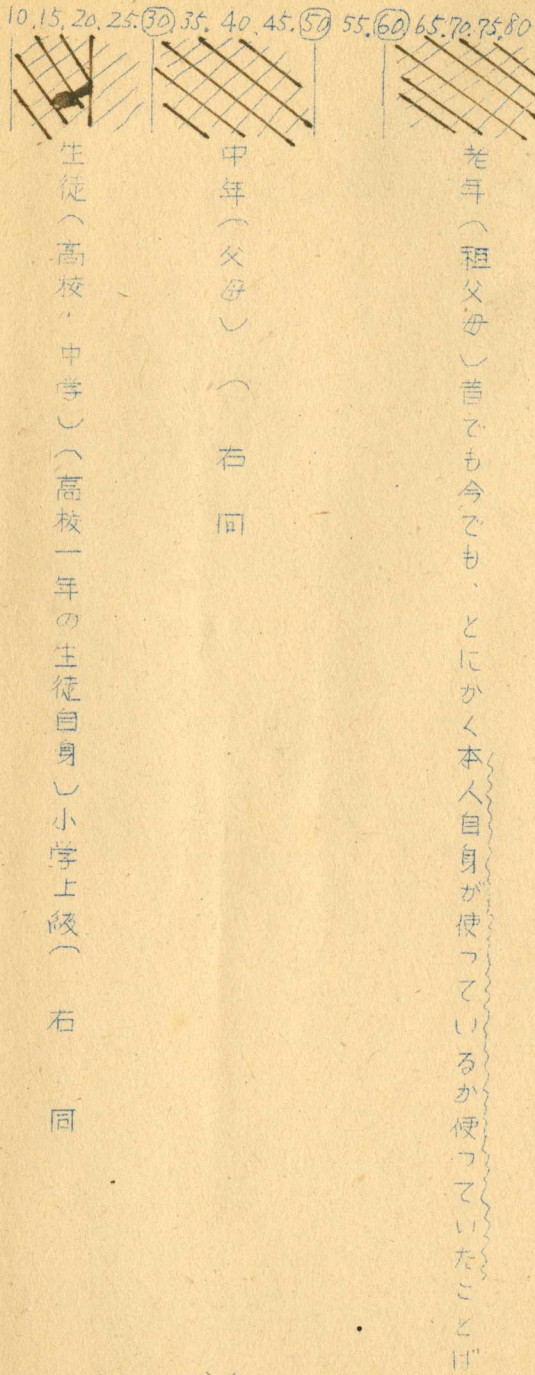
加藤正信先生よりの指導助言
鈴木先生

お便りうれしく拝見致しました。綿密な御計画、非常に結構に存じます。
つきましては、先日同様何もお役に立たないとは存じますが、おことばに甘えて七月四日（土）お昼
休頃御校にお邪魔させて頂いたいただきたく存じます。伺ひよろしくお願い致します。
さきほど、国語学の主任の佐藤喜代治教授とも御校の御計画のことについて話し合いました。教授も
非常に関心を持つて居ります。

六月三十日

加藤 正 信

被調査者の條件は、その部落で育った人であれば女性でも良いのではないかへむしろ生徒自身との
間における世代の差を比較する場合には女性のほうが、性を一定にしておいて世代だけを渡えるとい
う意味で言語の差異の要素の分析上好都合か」とも愚考して居ります。



項目「かまきり」

のようにして、ひとつの項目について、三つの世代にわたる分布図を画くことを目ざしたりどうでしょうが。たとえば、空想図ですが

老年



中年



若年



の如くです、世代の差に重点をおけば、それほど郷土誌にこだわらずとも「言語生活」という面から考察できる 生きたものになるかと存じます。

鈴木先生

先日御校にお邪魔いたし、衆しく過ささせていただきましたことを御礼申し上げます。

さて、調査項目の件ですが、調査しやすいものをオ一に考え、なるべく伊具郡内で老のあるものを私の案として選んでみました。ひとつの郡の中ではつきり方言分布の境界が引かれることはめつたにありませんので面白い結果のぞうなものは数項目しかないと考えますが、伊具郡内では同じであるという項目でも、あとで、亘理、紫田、刈田、伊達、相馬の諸郡の伊具郡すりの地域に通信調査をすれば伊具郡に入ったとたんに変つていくことの解るものもあるかと存じます。ですからやりかいはあります。

伊具郡内におおむね一

なほ、国語研究所の調査票のところに（絵）とあるものは、その絵が私の手もとにありますので、調査表附図を、生徒さんがお書きになるのをでしたら、指定された絵を私が調査に使わない期間ならお貸しいたします。私は八月一日ころまでは仙台に居りますので、調査票に關して、また、出来上つた調査

票にする調査の仕方などについて、もし御希望でしたら、さしでかまじいようですが、よろこんでお邪魔させていただきます。

とりいそぎ乱筆にて矢礼致します

七月六日

加藤 正信

調査項目の説明文は皆さんが調査しやすいようになるべく普通名詞を多くしてみました。これは、私としての意見ですから、適当に取捨しさらに新らたにつけ加えて下されば結構です。その場合普通名詞とか単純な動作を表わす動詞などの方が望ましいと思います。

なほ、調査項目の排列も意味の関連のあるものをつづけて行くというふうに工夫すれば、それだけ、調査の際は相手の頭に抵抗を生じさせず、スムーズに行くことと思います。

部厚いアンケートの山を整理し、精選して百二十一項目について地区別方言の一覽表を複製された皆さんの御努力に敬意を表します。調査が難しくなるのをここにはとりあげませんが捨て難い貴重なものも沢山ありました。

拝復

お便りありがとうございました。学期末のお忙しい中をこの調査研究のため御精進されている由敬腹致して居ります。

さて、五項目にわたる当面の御活動について潜越ながら愚教して居るところを述べさせていただきます。失礼はお赦し下さい。

一、調査の説明文について

御苦心御工夫すばしく思いました。ただ説明の文章はあまり長くせず、普通名詞の場合実物または絵を指すことと主として説明文は補助的にした方が回答がスムーズに行くのではないでしょうか。印の項について愚案を示します。

一、**「体」**：目今の手足胴全部を指す。順序は身体の各部分の終つたと承のあとが適當。
 二、**「子」**：絵を用いる。ウチノ、アソコノ、では *My son my daughter brother sister daughter*

13. きれいな赤ん坊のことを言うときは、メンゴイ()です。では、今度は二十オぐらいの女の人
色が白く……

17. 遠慮ない……その家へ行って出されたお菓子さペロペロ食べたり、誰とでもよくしゃべり、人の

悪口を平気で言ったりするような人をどういう人と言いますか。

19. これにあたる方がどういふ場合のニュアンスを指すのか、それを調べないと規定で
きません。

26. ひきがえる……普通のカエルよりもつと大きいカエルで背中にブツブツのあるもの、のそのそ歩く
26は24の次に入れたら良いでしょう。

43. タ 立……夏の夕方大ツブの雨が急にザーと

49. う そ……本当は人のものを盗んだのに、その子がいや俺は「盗まない」と言いました。その子は
何を言ったことになりましたか、本当の反対です。

2. 調査地典、被調査者、御計重結構に存じます。

3. 略図

4. 調査期日

5. 白地図、結構に存じます。調査票ができましたら、それに倣って、先生が一回主役文んの前で調査
の模範演技をおやりになることをおすすめてします。全員の賛同法を文章だけでなく実際の雰囲気ま
で統一するためにも、また、答のでもうもないときは、調査票の規定の許す範囲内で、ユーズさ
かせて説明することの可能なことを先徒に急得させることのためにも、答が二つ以上でた場合、そ
の意味の相違、ニュアンスの相違、新、旧の相違などを必ずききとり注記をすることなどをあす
めします。

なほ、絵と同封で拙論を贈呈致しますので、もし御参考までに御笑覧下されば幸甚に存じます。
本格的な御活動さひかえ、ますます御奮闘なされることをお祈り致します。御成功をお祈り致します。
七月十五日

加藤正信

伊貝郡方言地図

凡例

◎ ×

◇ マナブ・マナフ

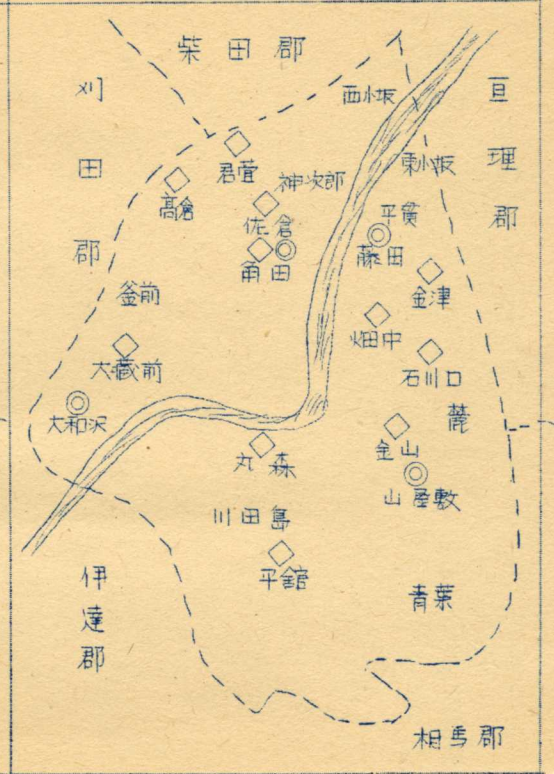
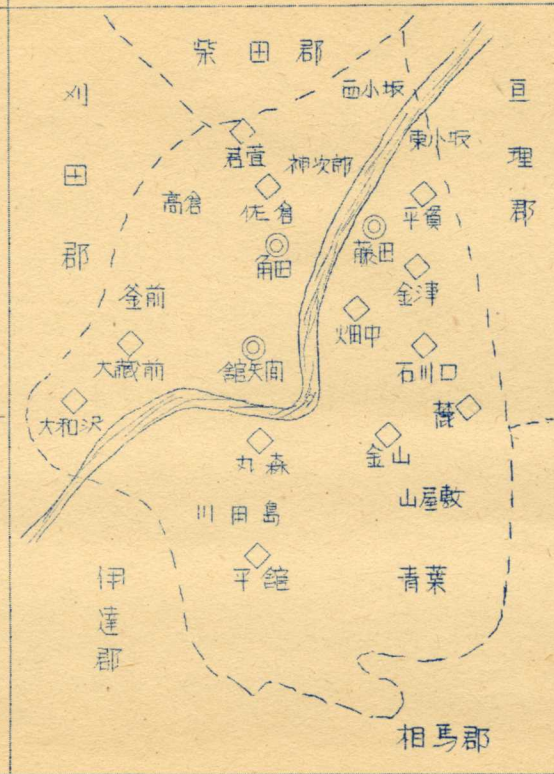
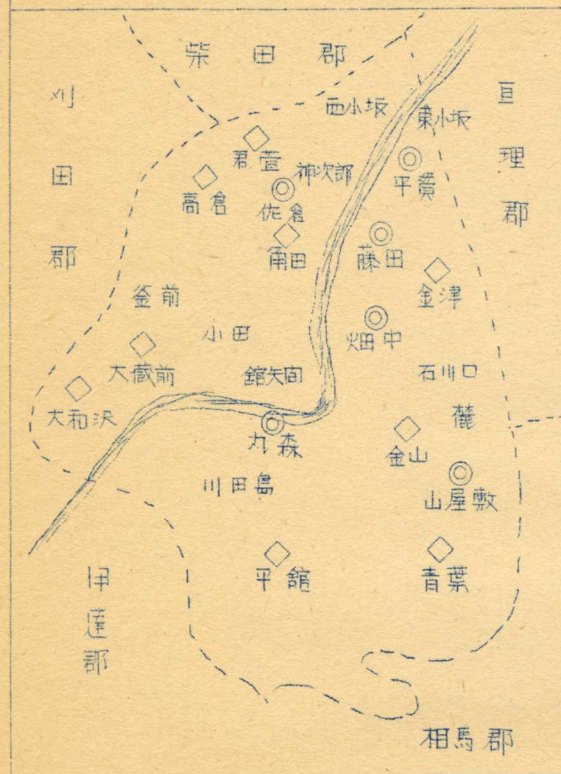
調査項目番号 1

共通語形 目

10才台

30才台

50才台



山沿いの「マナグ」「マナク」は、古語の「まなこ」に由来するものであろう。

「^レ」という言葉が藤田・南田・大和次などのような川沿いを中心に、五十才代から三十才代・十才代に移るにつれて、南北に発達して行くのが見られる。

山沿いでは十才代になっても「^レ」ということばが使われていない、このことから川の下流から共通語が侵入したとも考えられる。

目という語を辞書で見ると、古語として「マナコ・眼」などが書いてあった、このことから、今では「マナコ」という言葉が使われていないことをはつきりと示すことが出来る。

このような言葉の発達を見ると何かの原因で新語が発生、世の地域その影響がないとすれば今から二十年後には東西南北の方にも発展して行き「マナグ」「マナク」から「^レ」という標準語に変わって行くかもしれない。

一手 小野 昭子

20

伊 貝 郡 方 言 地 図

調査項目番号 2

共通語形 ひたい

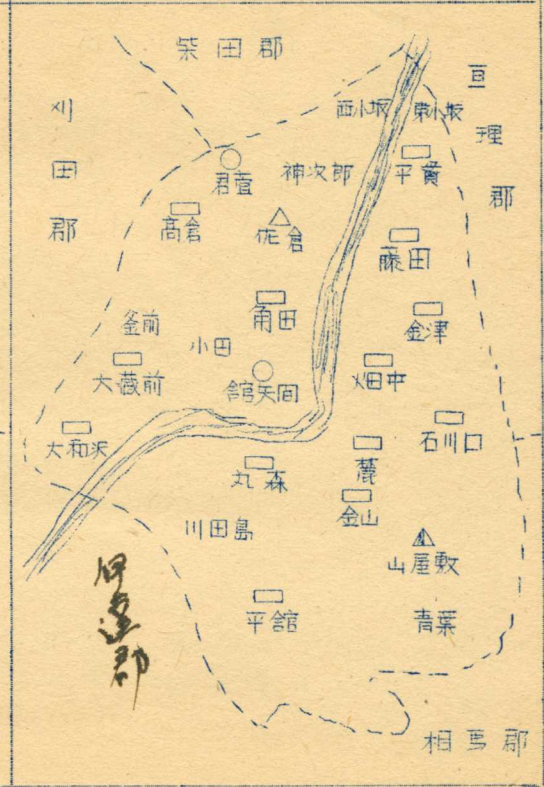
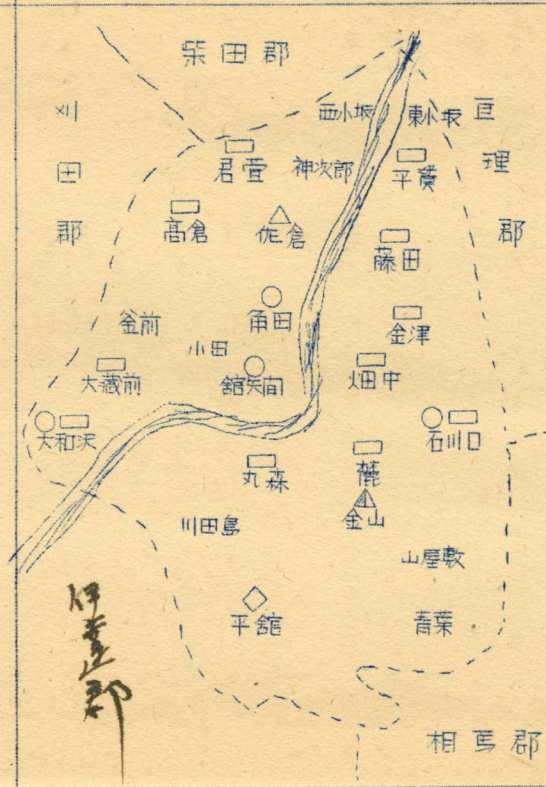
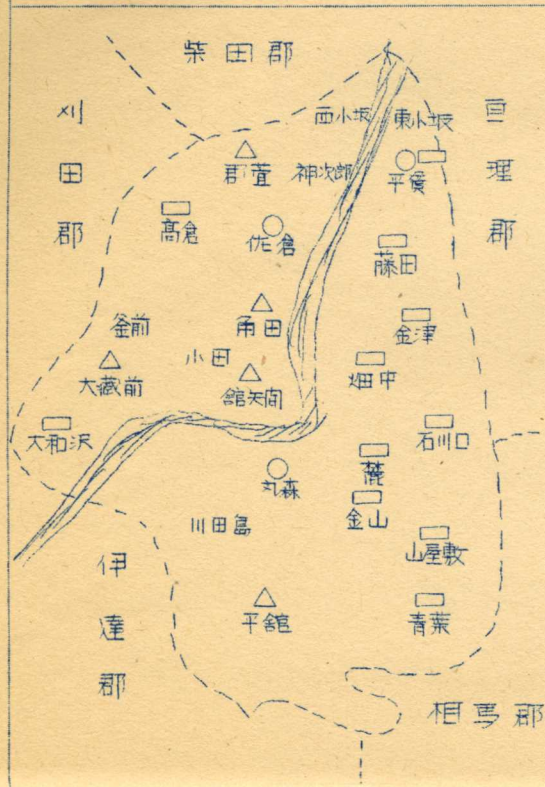
凡例

- ヒタイ・シタイ・ヒテ
- △ デナズキ
- ◇ テナズキ
- ナズキ・ナズジ
- △ オデコ

10 才 台

30 才 台

50 才 台



ヒタイは共通語形、五十代、三十代、十代を通じて見ると川沿えに侵入しているように感じられる。

五十代では、川に沿って「ナズキ」「ナズジ」の傾向が多く一部の例外として館矢間は共通語に近い言葉を使っている、同じく五十代の佐倉で可受らしい「オデコ」という言葉も聞かれた。

五十代の方が四十年前に話していた言葉を現在もそのままだけはそれに近い言葉と変えないで現在話しているという前代がなりたつとすれば、現在の十代と比較する事はその四十代の間にいかに言葉が変化したかという事が推論する事が出来る。その変化は三十代と五十代との変化を聞くと角田・館矢間を中心に通語又は共通語に近い言葉が発生していると考えられるであろう。

それが、その後二十年の間につまり三十代（又は十代）において共通語とはまったく違った「デナ」を新語として発生したのだろう。

十代では南の方で使っている事が聞かれる。

又、その現象が方言形「ナズキ（ナズジ）」は西の方へおし流されると同時に西部の山間部においても同様のことが聞かれる。

たとえば高倉、大和沢その名ごりをいまだにとどめているのであらう。

一耳 佐藤ひろし

伊 興 郡 方 高 地 図

凡 例

○ フチビル

△ フチビラ

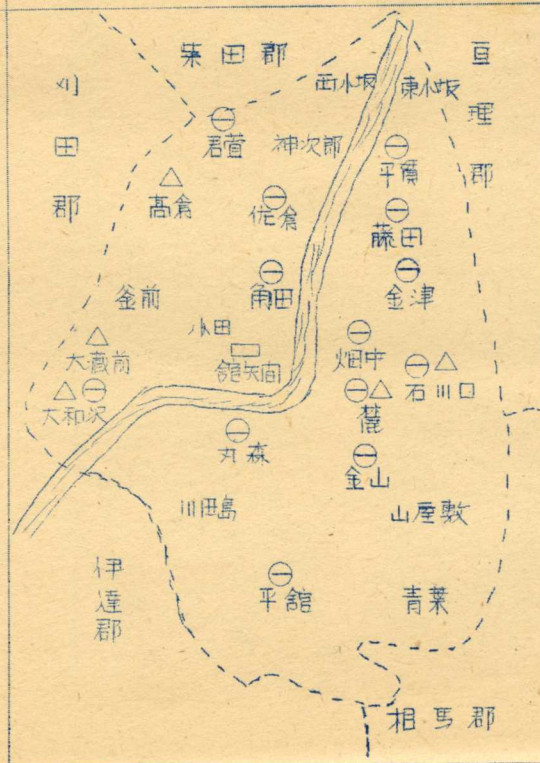
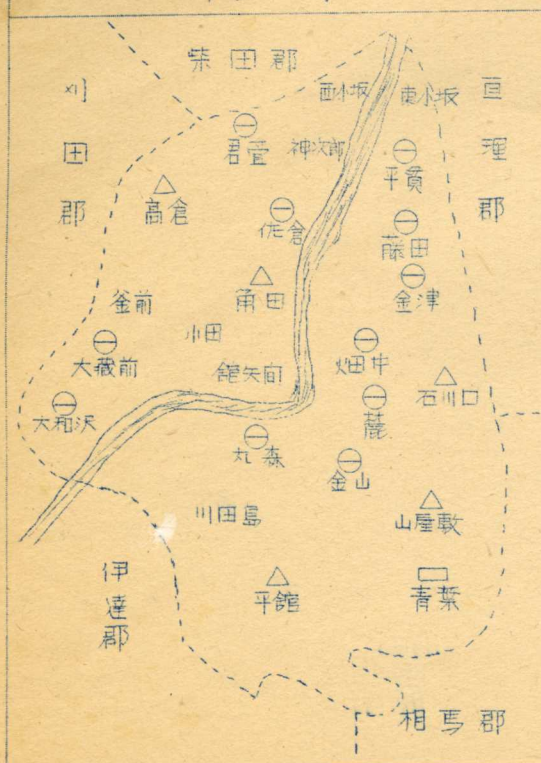
□ フチ

調査項目番号 3 天 通 語 形 唇

10 才 台

30 才 台

50 才 台



山間部地帯より文化程度が高く人口密度のある平野から山間地帯へ言葉が流れてゆく仮設がこの場合も考えられるとすれば、五十代の分布地図によると、阿武隈川一帯の平野が「クナビル」といわれ、山間部が「クナビル」といわれているが、以前は当地域が凡そ「クナビル」と共通語形がつかわれていたと推定されるであろう。その原因は今後の問題だが、何らかの動機に「クナビル」が「クナビラ」と変化したと考へざるを得ない。

更にこれが二十年の経過するにつれ、以前の共通語形「クナビル」が再び発生し、それが波紋状に広がり、以前使用されていた「クナビラ」が比較的文化的遅れ^殊山間部へ押し流れていくようである。それが十代にあつては三十代よりは更に広い地域へ広められている。

又再び出現した共通語形「クナビル」は阿武隈川一帯がその発生地ではあるが、その中の何處という根拠がないので断定はできないが、角田、丸森を中心に行われたのではなからうか。

鈴 木

五十才台は全部「オド」^レ「オド」^レ「オト」^レと言っているが、三十才代になると、佐倉に共通語形「アゴ」^レという言葉が入って来た。

十才台には角田、丸森、大蔵川前、平館のうちに「アゴ」^レの範囲は大部広くなつて来た。

世図　その進路を見ると、北の方から南に向つて順々に伝つて来ていると思われる。角田、丸森はいづれも国道筋で交通もはげしい所ある。こんな奥からも「アゴ」^レという語は早くから発達した、仙台、船岡、白石の方面へ買出しに行つた行商人が自然と覚えてきてそれが普通に使われるようになったのだらうと思ひます。

三A　星　吉　子

伊興郡方言地図

凡例

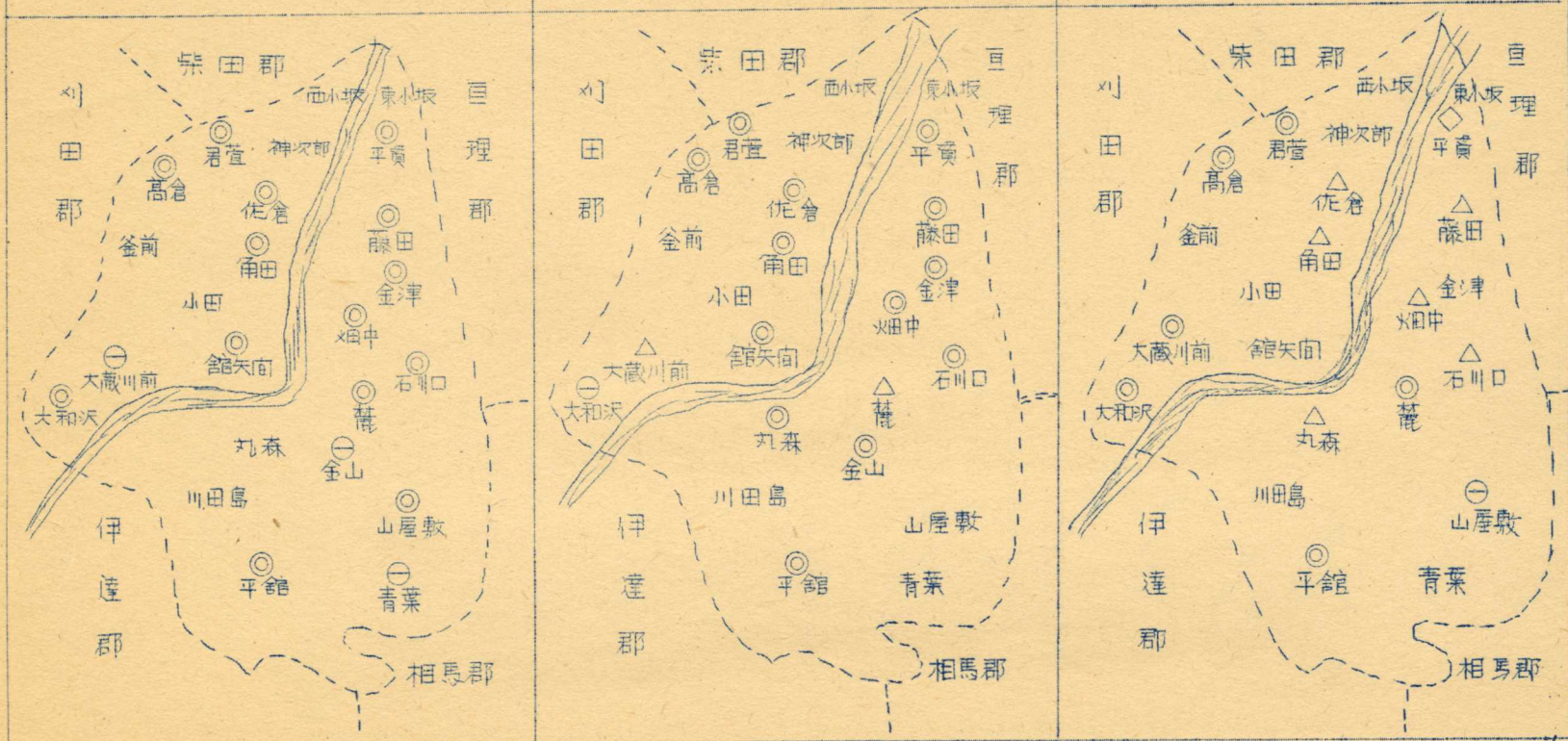
○ クビタ
△ クビタ
◇ クビタ
⊙ クビタ
● クビタ

調査項目番号 5 共通語形 頭

10才台

30才台

50才台



この地図を見ると五十代よりも十代が多く共通語を使っていることと阿武隈川に沿っていることそれに奥地に入らず人口密度の高い地方が共通語を使っていることがわかる。

五十代と三十代と比べ一般に「クピタ」「クピタ」は阿武隈沿に活に話されていたのが共通語形「ピ」におされ、十代に至っては全くみられない。その共通語形がどの方面より入ってきたかは知りえないが、川沿に話されていた方言形がその共通語形に影響され消滅しているのは明らかである。当地方の南半分では「ノド」を一定している。なぜ五十代よりも十代の方が多く共通語を用いるかは、学校ではもちろんだし、皆が共通語を使っていれば自分の言葉は皆と違うと思うと自然とあるものである。だから五十代よりも十代の方が多く使っていると思われる。それから奥地と町では奥地の方は不便なので人の出入りも少ないし、だからそこだけの言葉でお話ししているのではなかろうか。町では多く人が出入りするし、他の部落からきた人が話すのを聞いてもわからないと思うならば、やっぱりわかりやすい共通語でお話しするようになるようである。

一平 池田 せい子

伊 貝 郡 方 言 地 圖

調査原目番号 6 共通語形 ひじ

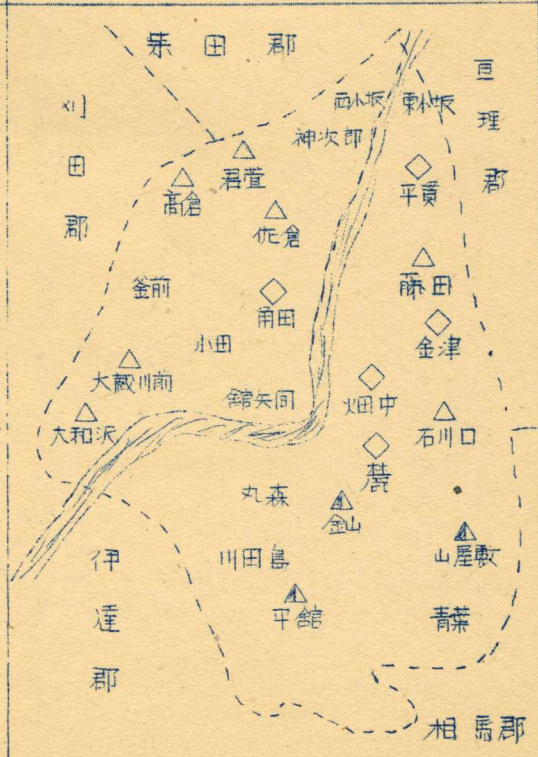
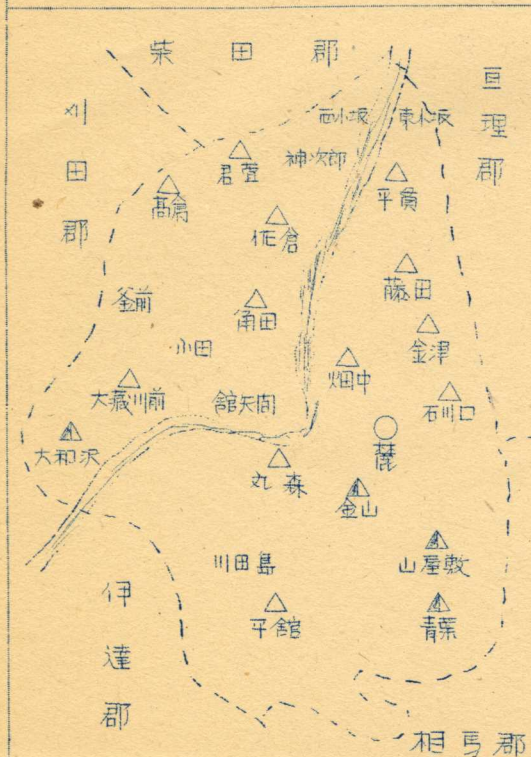
凡例

ニキ コツ ツズ ヒズ ヒギリ
・ コツヤナ
ジッズジサ
ヒヒヒヒヒ
△△◇○□

10 才 台

30 才 台

50 才 台



五十代の図をみると「ヒズツリ」「ヒズツキ」がだいが使われているのに対して三十代、十代と時代が流れるにつれて消えていき、四十年後の十代では全く使われず、かわりに「ヒシ」「ヒズ」が圧倒的に多い。これは古くから伊賀郡内を使われていた共通語「ヒシ」「ヒズ」の勢力におされ消滅し十代の分布図のように北半分は今日迄残っているのさう。

これに対して南半分では、ある一部をのぞいては「ヒツコギ」「ヒツコニ」が五十代、三十代、十代と共に使われているのはその他が山間部のため交通が發達していないことを理由にして現在でもそのまゝ残っているらしい。

十代の分布図に「ヒジャ」と表わされているが、これは被調査者の聞きちがいからでてきたのではないだろうか。？、なぜなら「ヒジャ」とは足の「ヒザ」からなまったものであろう。

三十代で君直に「ヒサナ」というものがみられたのは、面白い表現だと思つた。

一年 目黒さき子

伊 貝 郡 方 言 地 図

調査項目番号 9 共通語形 つば

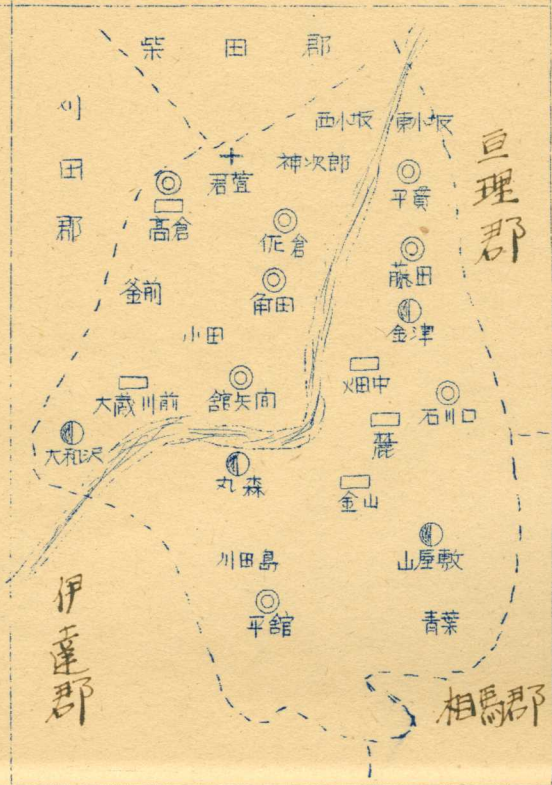
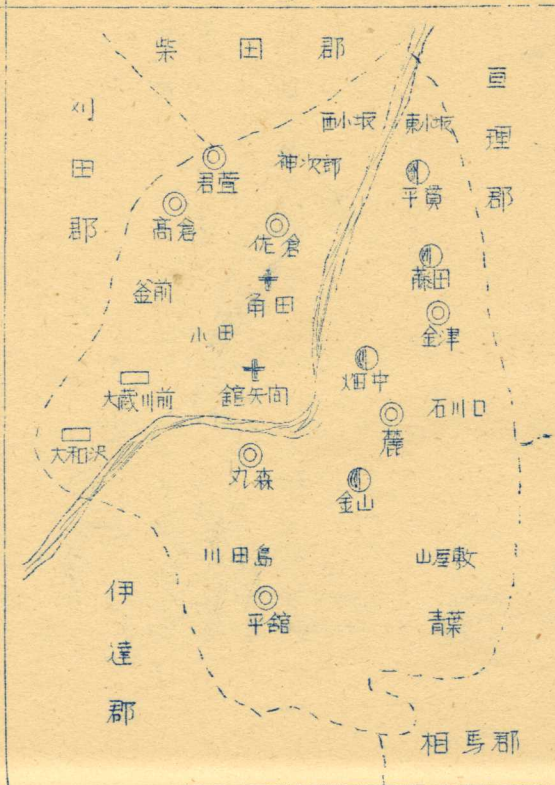
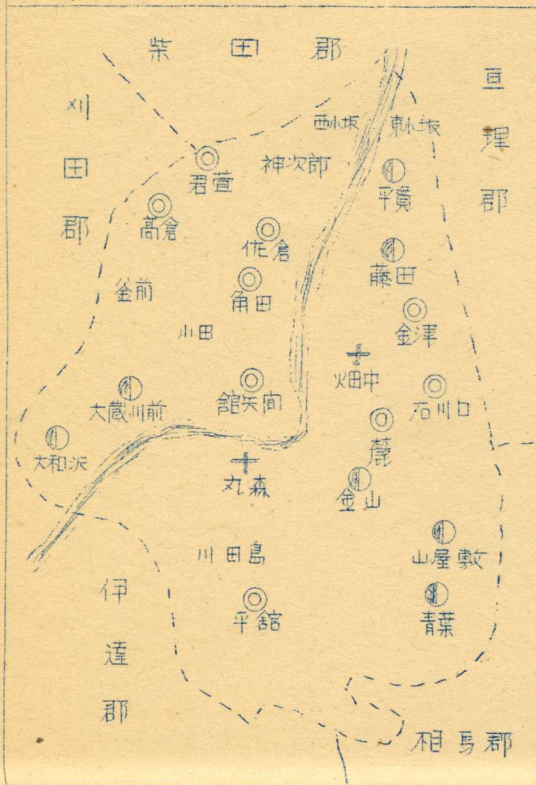
凡例

- + ツば
- ◎ タンペ
- ⊙ スタンペ・シタンペ・+タンペ
- シタキ・シタギ・シタジ

10才台

30才台

50才台



五十才代 川の下流の地域で「タンペ」と言っている。中流、上流では「シタキ」等が目立つている。

三十才代 阿武隈流域全般に「シタキ」等言っている者はなくなつてゐるがまだ上流の山あいの方へ行くと聞かれる。
十才代 全く「シタキ」と言っているのはみられない。

このことから言葉は阿武隈川の流域に沿つてだんだんと新しい言葉に変わリ古い言葉は山の方に追いつめられ、しむしには消えて行くということがわかる。

例えば「シタキ」「シタギ」等これらが以前は当地方全般に言われていたのがその後に表示された「タンペ」「スタンペ」等は西方へ移され十才代の今日には全く「シタキ」は消滅しているとみられよう。今日の東部側は一带に「スタンペ」等言われ、これが更に丸森より河沿いに西部へ移つていつたと推定される。

一年 加藤 康子

伊 貝 郡 方 言 地 圖

同例

シ・ウラゲーシ
エヤ・イ
ガク
ラー
ウ
ウ
△
□
①

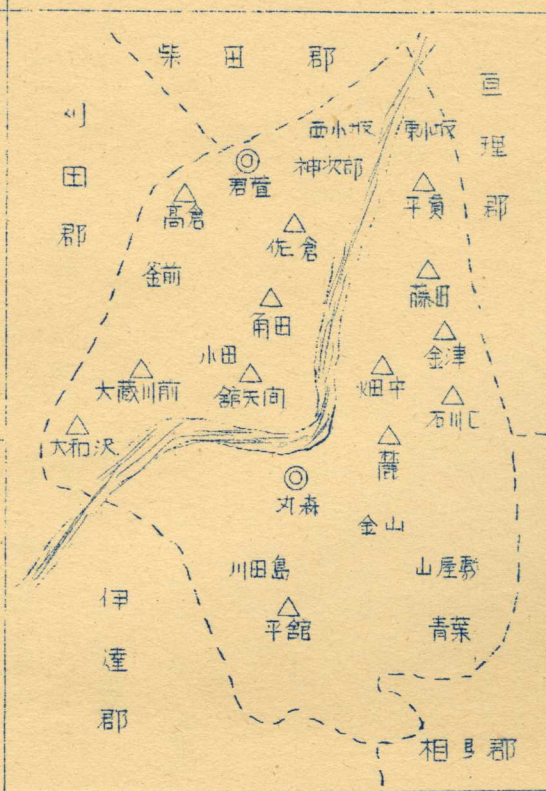
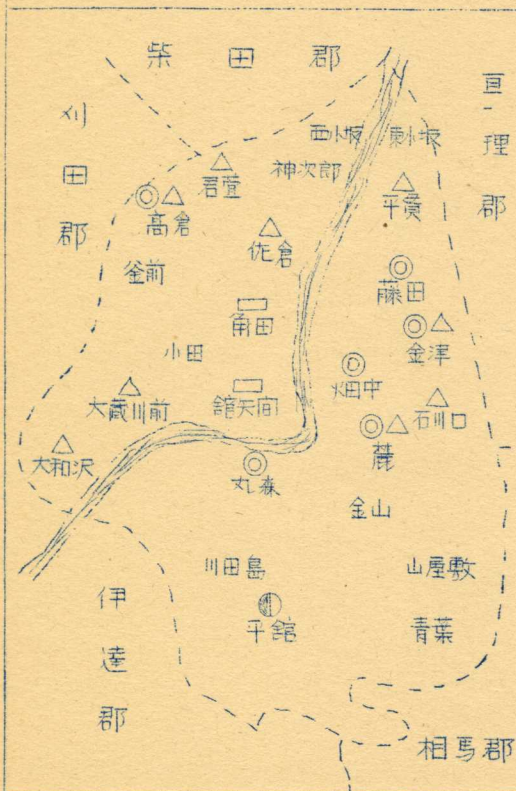
調査項目番号 21

共通語形 うらがえし

10. 才 台

30 才 台

50 才 台



現在よりも四十何年か前にあたる五十代の人達に圧倒的に方言形の「ケ
ーチャ」というのが多く丸森と君薈のみが共通語形が使われている
五十代では平野地帯でも方言形「ケーチャ」が使われているが、三十代
をみてみると、共通語形がどんくふえている。と共に方言形はさらに
減少している。

その共通語形が増えている中心地は丸森で、金山、石川口に移動してい
ったと考えられる。筒田の川向は全般に共通語形が使われているであろう。
十代では丸森一帯と同様に筒田周辺も共通語形が使われていると思っ
たが、調査上のミスも考えられるけれども、「ギャク」「ジャク」など
というような結果が出た。しかるに裏返して「ギヤク」「ジャク」と言っ
ているやにも考えられる。この点再検討を要すると思われる。

一年 八江 幸子

伊 貝 郡 方 言 地 図

調査項目番号 22 共通語形 こげくさい

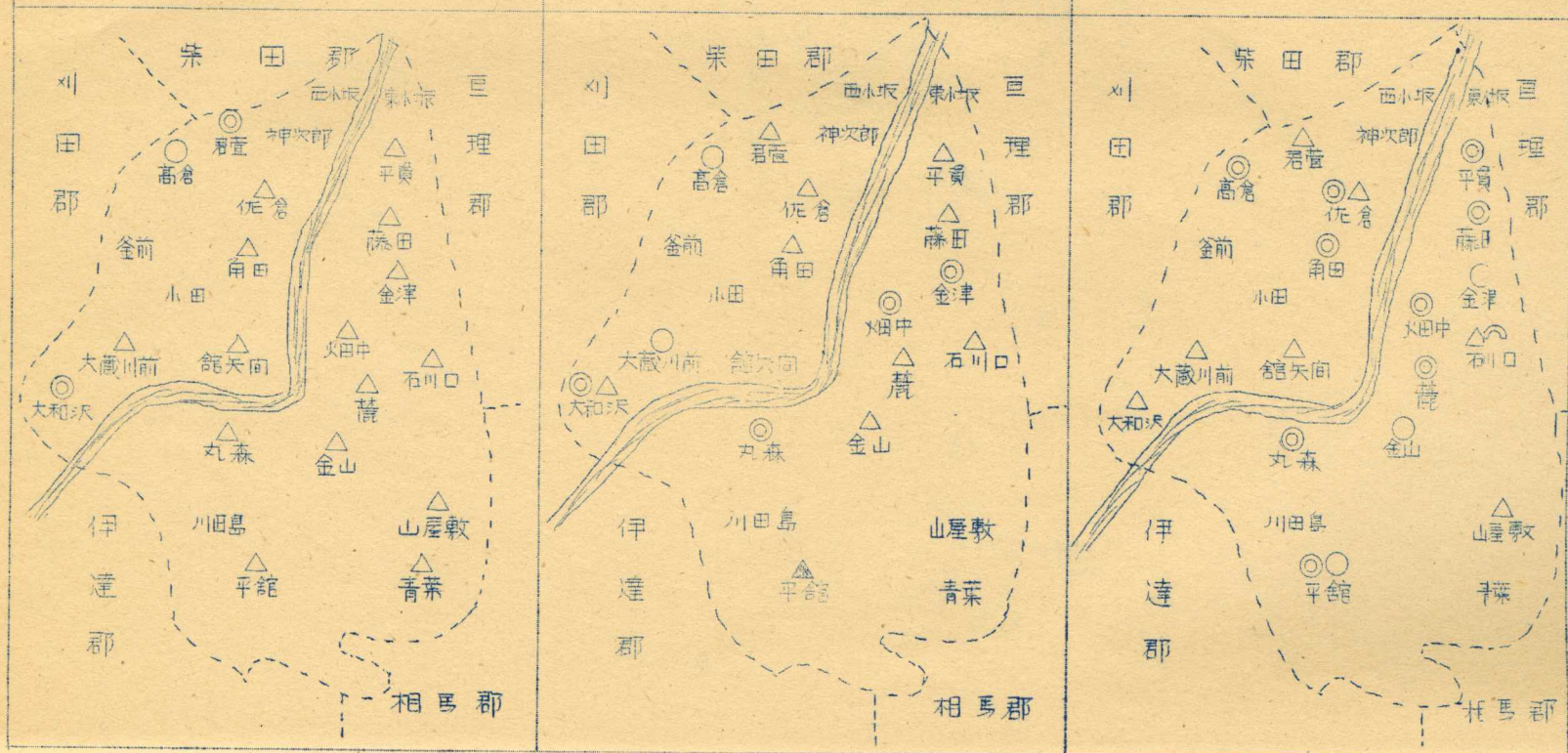
凡 例

- △ コ テ ク セ ー
- ◎ イ ブ ク セ ー ・ イ プ ク セ ー
- ▲ コ ブ ク セ ー
- ヤ キ ッ ケ ク セ ー
- ⊖ ツ モ リ ク セ ー

10 才 台

30 才 台

50 才 台



地図全般をみて考えられることは、年代が若くなるにつれ、共通語又はそれに近い言葉が語されている。十代になると二・三ヶ所をのぞいて、それら共通語形がみられる。又、共通語の「コゲクサイ」の訛つた「コゲクデ」が相当にみられる。

これらの変化の状況を見ると五十才では特定区域ではないが若干の地域に共通語形がみられるもの。方言形は川沿いを中心に広がつて語されていたが、三十代と比較してみると、この二十年の間に川沿いに新語として共通語形があらわれ方言形は川沿いとはいえずその範囲は全くせばめられ、更に十代に至っては南北に流れるに阿武隈川を間にはさみ、東部側に共通語が語られ、方言形は君薺、高倉、大和沢の北面の山面部にその名残りさしめられているにすぎない。

思うに五十より三十代の二十年阿武隈川沿いに新語としての共通語がその周辺の方言形を移動又は消滅させ、次の二十年間に方言形は北西部へ移動していったのであろう。

一年 回 黒 さきり

伊 貝 郡 方 言 地 圖

調查項目番号 23

共通語形 うし

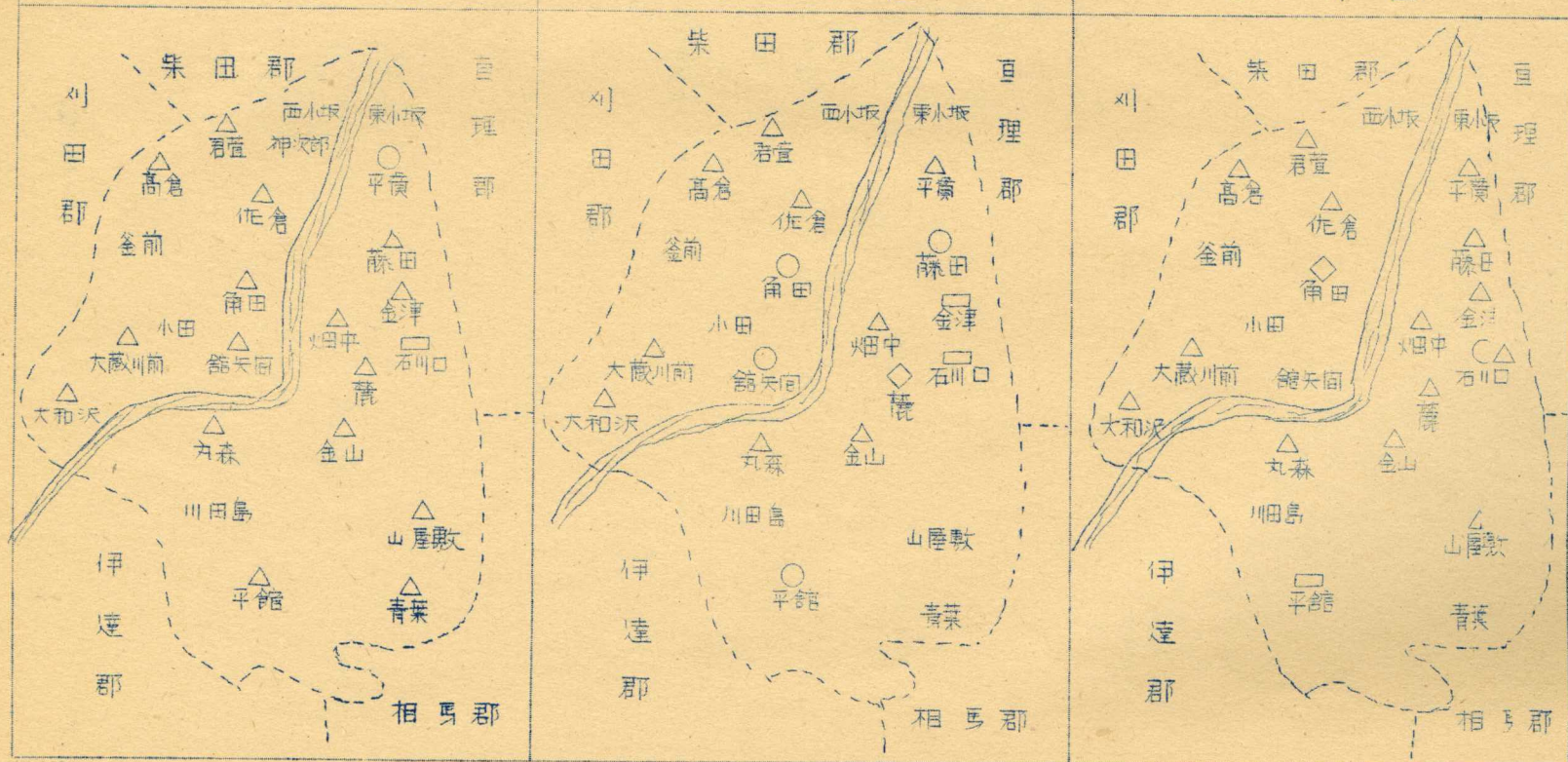
凡例

○ ウ シ
△ ヲ コ
□ ヲ コ (ウ シ)
◇ ウ シ (ヲ コ)

10 才 台

30 才 台

50才台



伊貝郡は岡田山にかゝまれた盆地であるため、言葉自体が仲々標準語に近くなる。これがため、この伊貝郡に生まれ、育つたものには聞きなれた言葉であると共に何んとなく親しみを感ずるものではないだろうか。この図を見ると、五〇才台に「ヤコ」が多い。

現在では田畑を耕やすのに機械が使用されるようになったが、五〇才台の人々には家畜がすなわち田畑を耕やす原動力となつていたため、

牛や馬に対しては、家族の一員のような感情を多分にもつていたために「ヤコ」と呼んで親しんだのではないだろうかと思ふ。

三〇才台は教市個人経営の自動車交通もずい分発達したし、三〇代ともなると言葉使い等にも注意を払い、方言を使つては用が果せない結果だと思ふが、岡田を中心としを岡田二・三ヶ所に標準に近い言葉が多く見られる。

しかしながら一〇才台では、それとは逆の現象がみられる、つまり、五〇台と同様な方言形を一〇才台でも使つているところをみると、三〇代の人々は対外的には、共通語を使つているとはいえ、家庭内ではやはり方言形を使つているものと思ふ。

従つて五〇代、三〇代と方言形を使うため、子供達にとつても方言形に不便を感じず、全地域に使用されているのであろう。

菅野 シヅ子

伊 真 郡 方 言 地 圖

調查項目番号 24 共通語形 蛙

凡例

○カエル・ケール

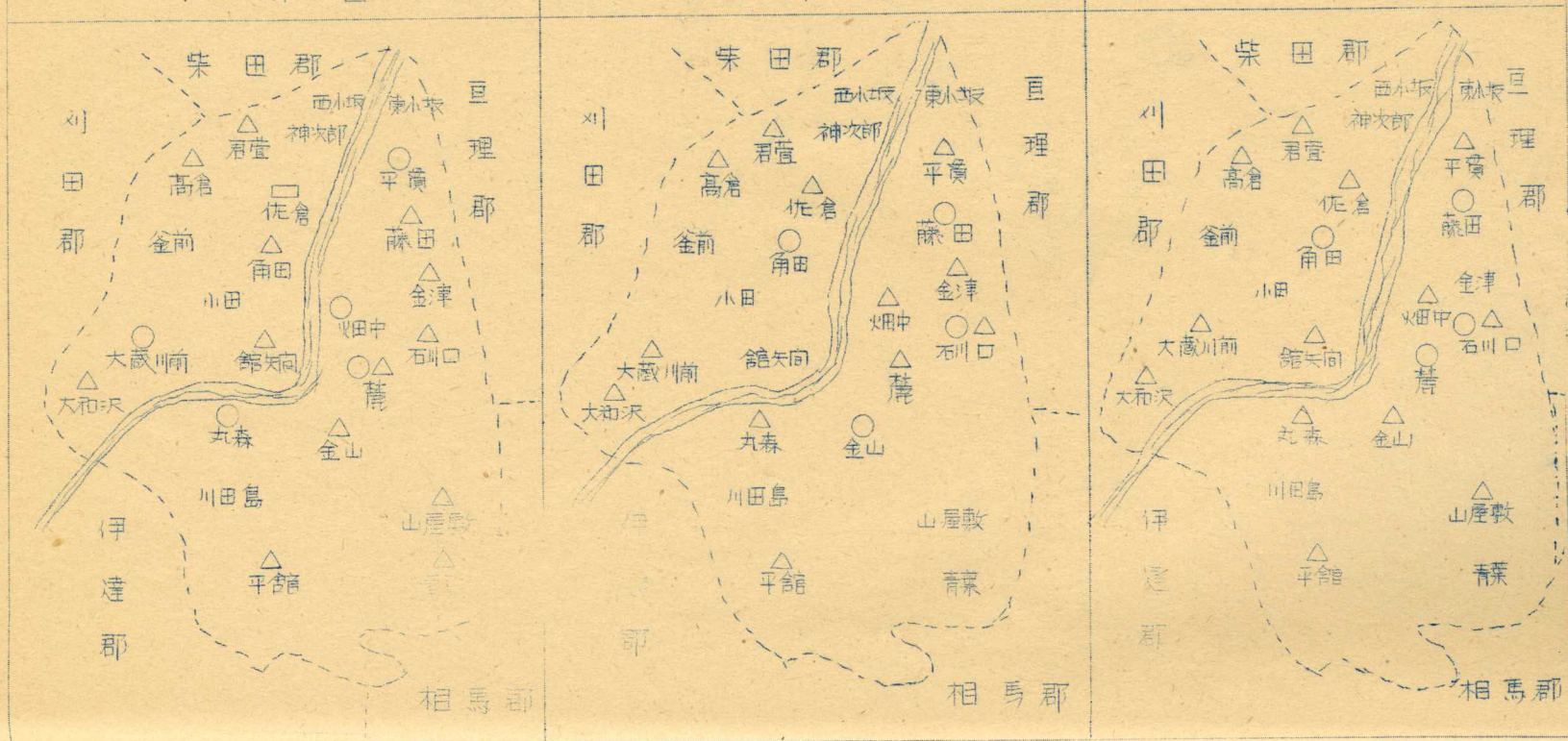
△ 丁 - ル

□ デールビッチ

10才台

30 才 台

50 才 立



角田、石川口、藤田などのように川沿いを中心にして「カエル」という言葉が使われる。

十才代に移るにつれて、西に向って標準語の「カエル」が発達して行くのがみられる。

年令的には、若くなつてもあまり方言形が衰つていない。「ゲール」はひらけた所に使われている。

山間部では五十才代、三十才代、腰に十才代になつても「カエル」と言う言葉は使われてはいない。

十才代になつて、佐倉では「ゲールビツ子」という語が起つた、これは「ゲール」が「ゲール」に滑つたものであろう。

一年 大寺 由利子

伊 貝 郡 方 言 地 図

調査項目番号 25 共通語形 ひきがえる

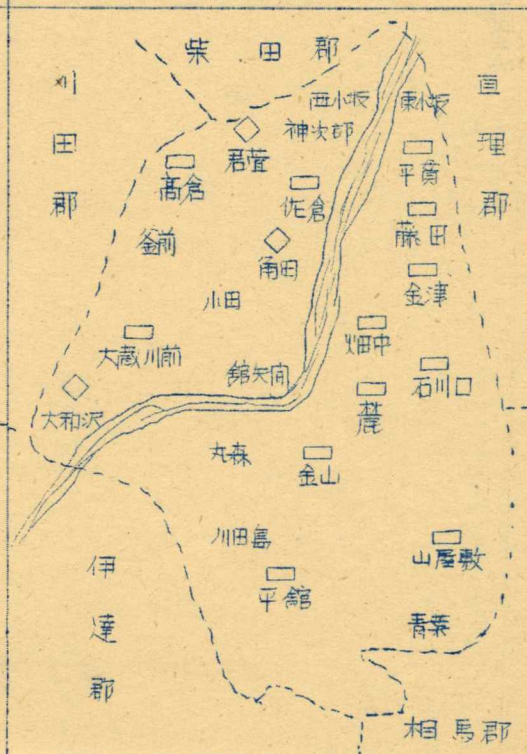
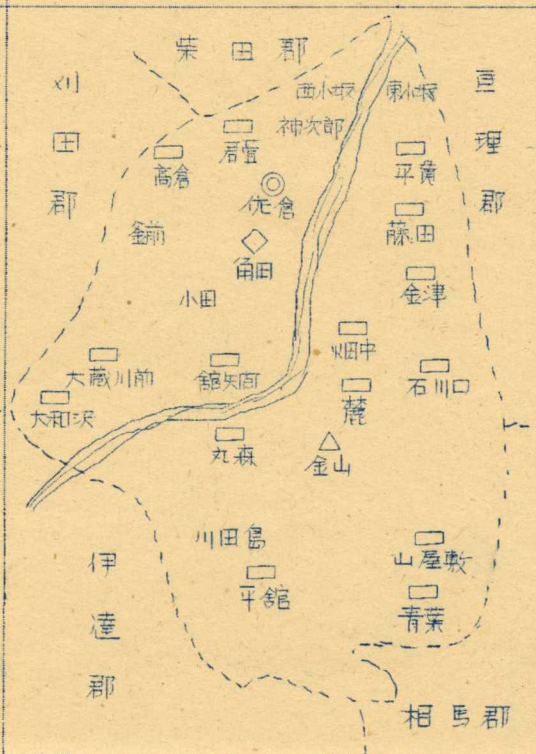
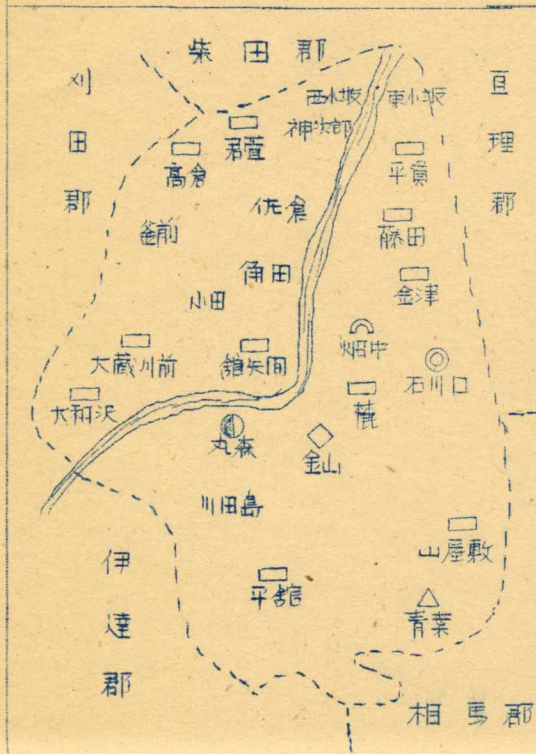
凡 例

- △ ガイ ド マ ビ
- ④ マ マ シ ッ
- ◎ マ マ シ ッ
- ◇ マ マ シ ッ
- マ マ シ ッ
- マ マ シ ッ
- 一 ル キ
- 一 ル キ
- 一 ル キ
- 一 ル キ
- 一 ル キ
- 一 ル キ

10 才 台

30 才 台

50 才 台



ひきがえる

この図でみると「ヒキガエル」という言葉がこの地方では種々の呼び方でいわれている。

五十才代においては「カエル」は農作物に害を与えるものとしてさげすまれてきた。

図をみると「マシビツキ」の中に「ドスゲール」の入ったのはこのひきがえるは身体全体が黒く、からだは短かく肥大にして「ドース」つまりうい病の表状を形容づけてこのように呼ばれたのかも知れない。

三十代みると「マシビツキ」の中に「イボケール」が「マ」が入ってきた。それも川にまつた所にニ・ミヶ所にみられる。

十代に入つても「マシビツキ」が大部分の地域で話されているものの、それは減少し、その他に「ガマケール」「ガマ」「イボケール」「ビツキ」とその云い方は数が多くなり地域毎に分化する現象がみられる。

三年 菅野 シツ子

凡例

伊 奥 郡 方 言 地 図

○ 十ヨ一十ヨ一

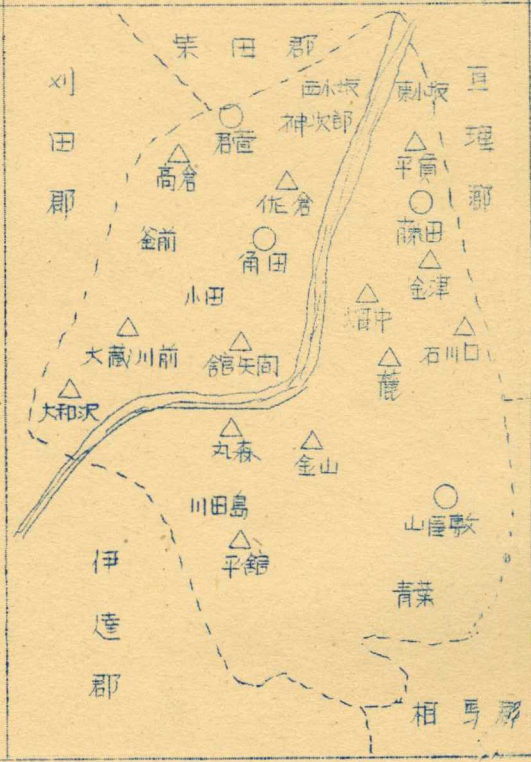
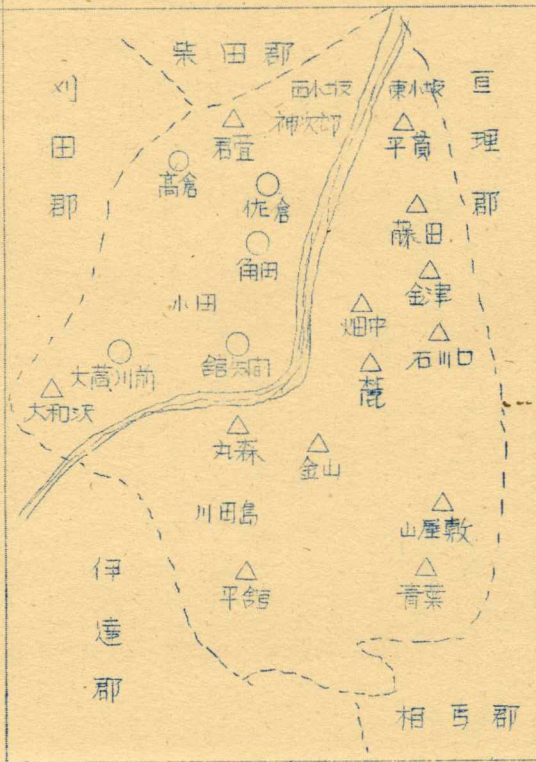
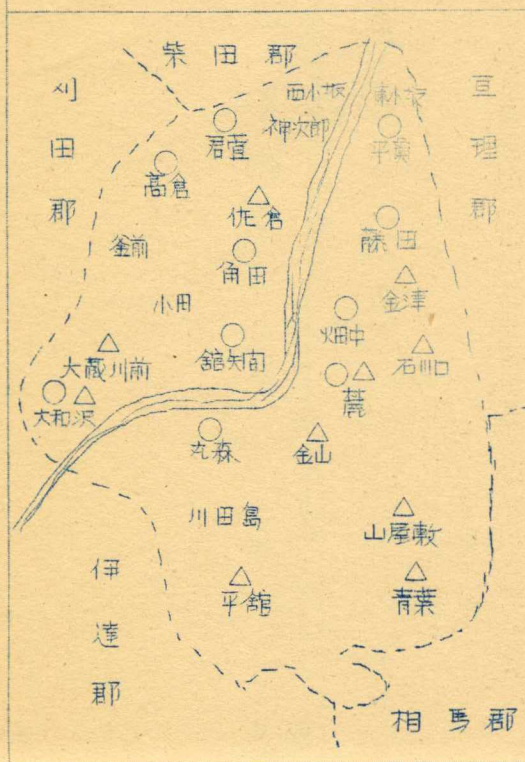
△ 十ヨ一マ

調査項目番号 28 共通語形 ちよう

10 才 台

30 才 台

50 才 台



五十代では共通語が方言の「チヨーマ」に比べて三分の一位であるが十代になると共通語がその半分以上を占めている。

五十代、三十代では角田を中心に通語がその付近に認められたと考えられるが、十代になると角田、館矢間方面から丸森に移って来、そこから枝野方面に広まったとも考えられる。

それはまたおき十代の方言分布図をみてみると、阿武隈川流域並びに北部の一方に共通語が使われているのが解る。

これは水上交通利用ばかりのためとは考えられない。わたしに考えられるもう一つの原因は教育の普及によるものではないかと思っている。小学校の一年生位で国語、算数、理科等で教えられた共通語である「チヨウ」というのをすぐ自分達の生活に融け込ませるということがわたし達特に小学生には多いのではあるまいか。

それでこの「チヨウ」という言葉が日常の習慣になつたと考えられるのである。

「チヨーマ」を使っているところへ共通語形の「チヨウチヨ」が侵入して来た速度がらみると今後は共通語形がどんどん南の方に進展していき、数年後には偶然な変化が来ない限り伊奥郡全体がこのように訛されることと思われる。

凡例

伊 貝 郡 方 言 地 図

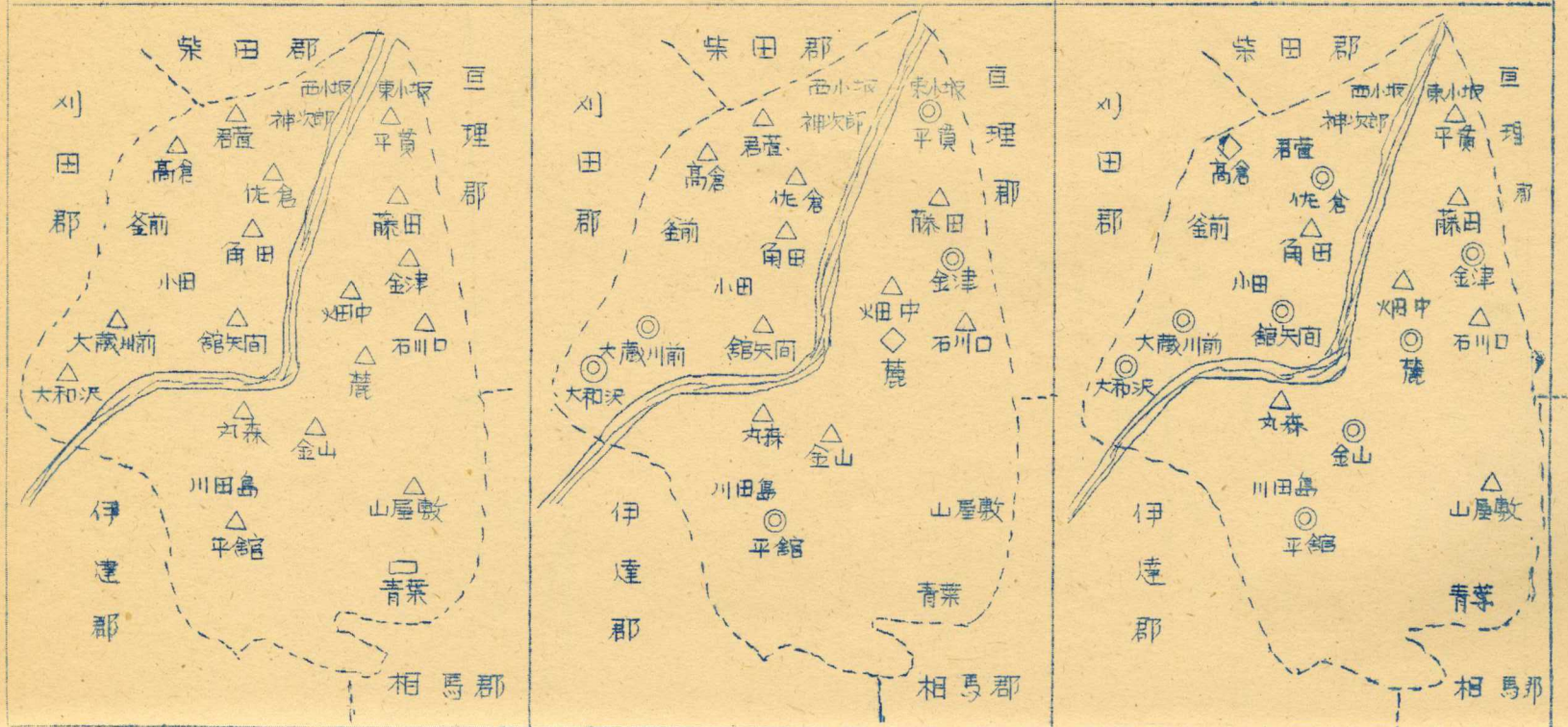
調査項目番号 29 共通語形 かまきり

- △カマキリ・カマナリ
- ◇カマカケ
- ◎イボムシ
- イボトリムシ

10 才 台

30 才 台

50 才 台



かまきり

五十才台に「イボムシ」と「カマキリ」は五令五分に使われ、三十才代になると、方言形「イボムシ」は次第に消えてそこに「カマキリ」が侵入して来た。十才代には青葉が「イボトリムシ」と言うだけで後の地方は全部「カマキリ」と言うようになった。

地図でその進路をたどって見ると「イボムシ」という語も阿武隈川沿に「カマキリ」と変つてしまつておりしかも平野部から山ぞいに入っている事が分かる。ここで案外町の発達している角田・丸森方面に御使いに来た山ぞいの人達が「カマキリ」という共通語を覚えて帰って行き、これが常用となったのだらうと私は思います。

「イボムシ」について、

私は小さい頃「カマキリ」を捕えて来て私達の手や足に出ている「イボ」をカマキリの前の方についているハサミで切らせようとした、もちろんあんなはさみで切れませんが、小さい頃よくこんな事をして遊んだ事を思い出しました。この記憶が間違っていないければ青葉で使っている「イボトリムシ」はこんな處から生まれて来たのだしよう。

そして一般に使っていた「イボムシ」の語源もここから生まれたのではないだらうかと私は思います。

三 A 星 吉子

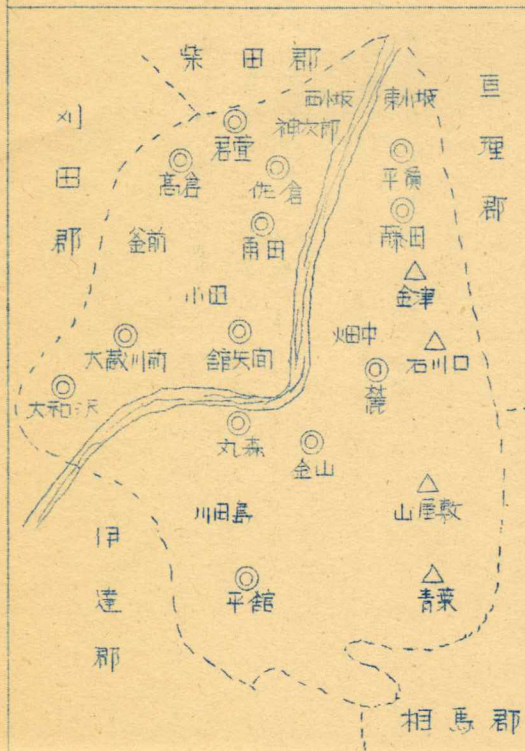
伊 興 郡 方 言 地 図

調査項目番号 31 共通語形 じゃがいも

凡 例

- バレーショ
- ◎ ジャガイモ
- △ ナツイモ
- アカイモ

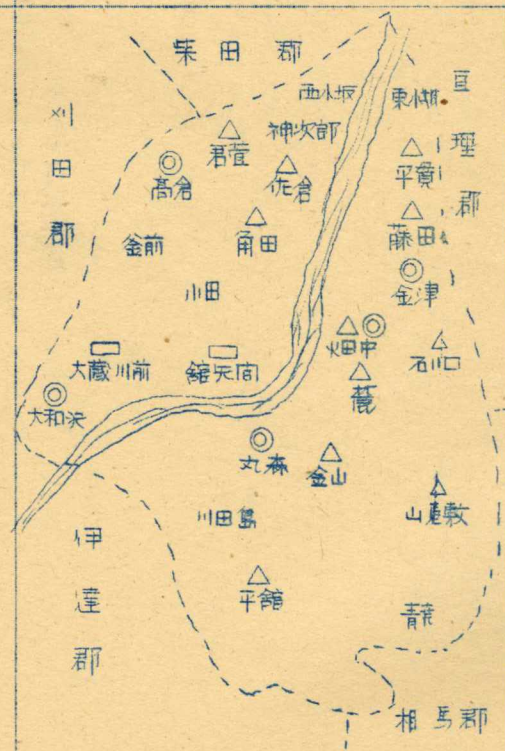
10 オ 台



30 オ 台



50 オ 台



三つの分布図をみて一般的に云われることは、十代では「アカイモ」は全然みられないが三十代、五十代では「ナツイモ」とも云われていると共に「アカイモ」とも併用されているが阿武隈川をはさんで「ナツイモ」が圧倒的に多い。しかしながら、年代が経過するにつれ五十代より十代までの四十年間に「アカイモ」「ナツイモ」の言葉は少なくなりその反面「ジャガイモ」はその数も多く使用範囲も極めて広くなっているが、今日僅かに阿武隈川の東部側を金澤石川口山屋敷、青葉と南北一直線上にその名残りをとどめているにすぎない。

次に三十代の館矢岡で一部「バレーシヨ」が使われているが方言形「アカイモ」「ナツイモ」の二語の中何れが古い言葉をきめる資料が無いのは残念なことだが、その使用する意味からみて、生活経験上「アカイモ」よりは「ナツイモ」が優勢な立場であるとみられる。かくして、以前使われていた語が優勢な「ナツイモ」にすつて狭はめられその使用度も減少していったと推定されるであろう。結局「ナツイモ」よりは「アカイモ」が以前使用されていた言葉だと結論づけられるであろう。

最後にその変化せる時期と場所であるが一見して変化せる中心地は甬田丸森以外には見当らないであろう。この場合甬田と丸森間の差違がみられるべきか否かは不明だが、現段階においては同一のものであったと判断して差支えないものと考えられよう。しかしながら同一のものとしても他の地域へ影響及ぼす際甬田丸森を区別無しに一つの震源地と考えてすいか否かは未だ研究不足だが、今回各代の変化状態をみると区別した方が適切であるように思われる。一般に川が同にあれば割に影響をばばものがあることから考えると五十代から三十代にかけて特に目立つ、畑中石川口、金山の共通語形は甬田より丸森からの影響が大であったようである。むしろ甬田の共通語形はその間は、君直、高倉への影響が強かつたのではあるまいか。

しかして次の三十代より十代までの二十年間には丸森より更に南下したことはうなづけられることだが甬田の方では更に佐倉、平蔵、藤田に北上すると共に川向へにもその進む方向が変つてしていると推定されよう。

伊 興 郡 興 方 言 地 図

凡 例

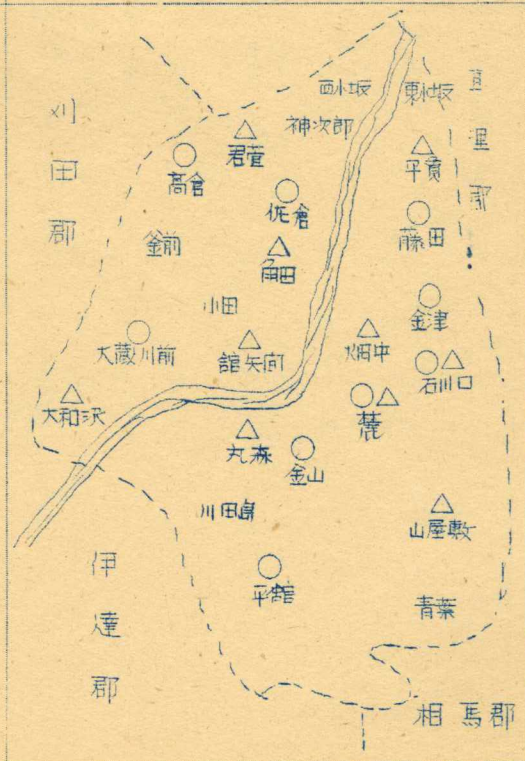
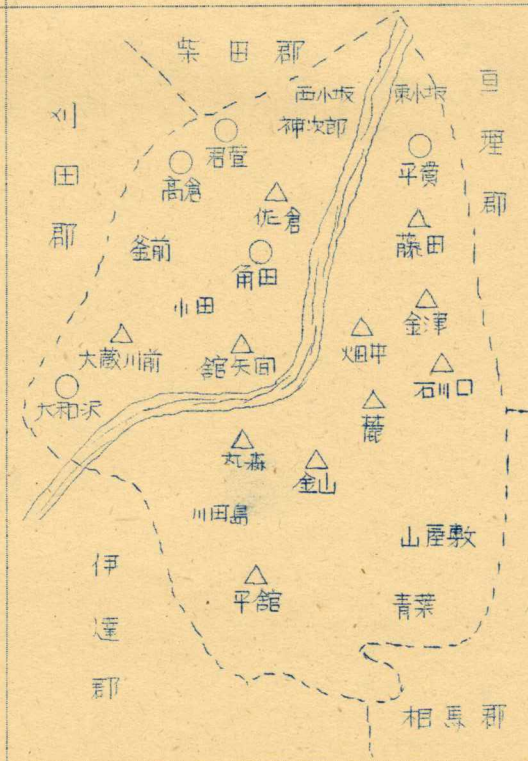
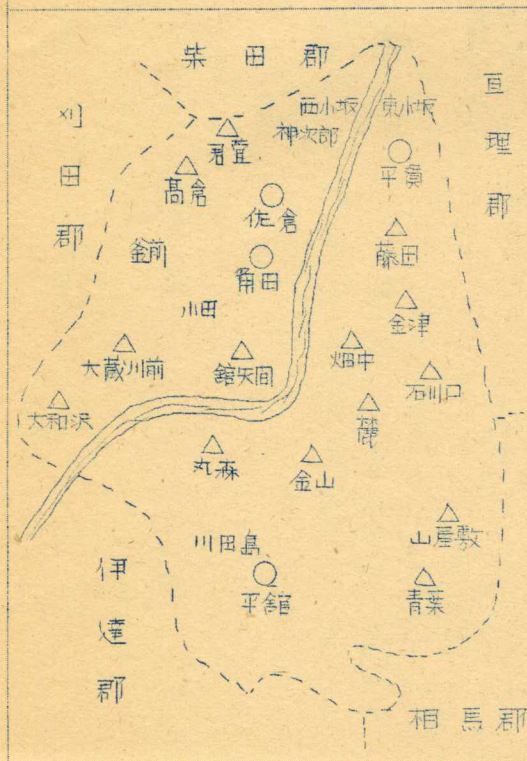
- トーキジ・トーキシ・トーキシ
 △ トーミギ・トーミニ・トームニ

調査項目番号 38 共通語形 どうもろこし

10 オ 台

30 オ 台

50 オ 台



共通語形として「トーモロコシ」としてあるが「トーキビ」「モロコシ」も同様に共通語であり同一物と言う。図でもわかるように○印は共通語、又はそれの訛ったもので「トーキビ」「トーキミ」「トーキニ」「トーキニ」等△印は方言で「トーキギ」「トーキギ」「トーキニ」「トームニ」「トームギ」等である。共通語やそれの訛ったものを使っているが「トーモロコシ」が使われず「トーキビ」が使われるのは後者の方が短く言いやすいためとされる。

年令的に見ると若くなるにつれて方言が多く使われていることがわかる。これは普通のと全く反対の現象なのでどうしてこのようになったのかよくわからない。

東の方へ金山・麓・石川口・金津・藤田へでは、昔は「トーキビ」又はこれが訛ったものが加えられていたのかもしれない。これが三十代になつて皆方言に変わってしまった。その理由は富理郡の方から入つて来たか、丸森、錦矢間から下つて来たか又は「トーキビ」よりも「トーキギ」の方が言いやすいためか判断しかねる。

南田・平賀のほうに五十代の方言に対して三十代、十代になると共通語を使っているものもある。平賀は川から東の他の部落とは違うが恐らく川向いから影響してきたのであろう。南田は最初、方言を使っていたが、たぶん、と郡の中心となつてくるに従い共通語が入つて来たのではないかとと思われる。佐倉・平賀は三十代だけが方言になつているし、君直、大和沢のように三十代だけ共通語を使っているものもある。以上のように見て来たが理由がわからないので残念に思う。

伊 貝 郡 方 言 地 図

調査項目番号 52 共通語形 かくれんぼ

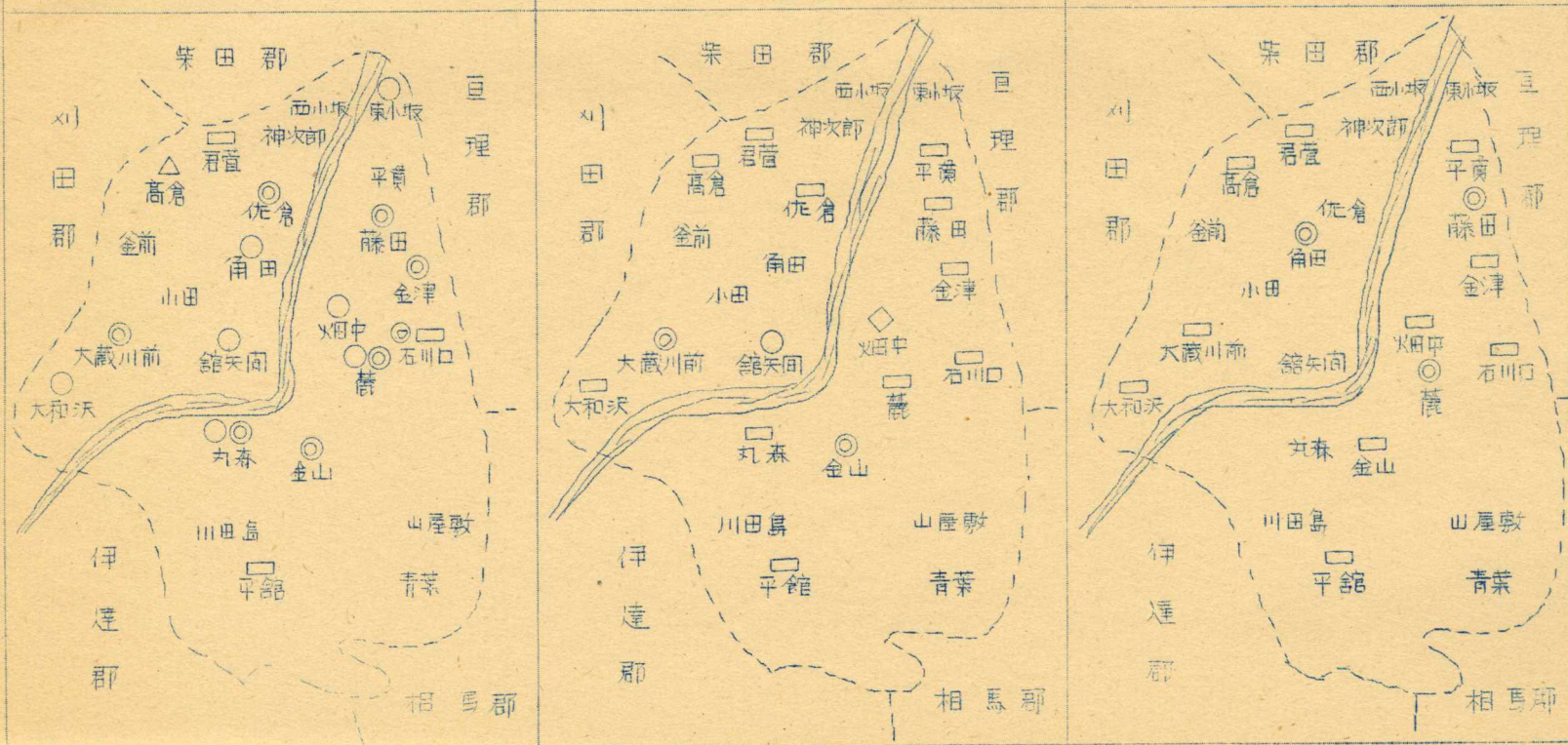
凡 例

- かくれんぼ
- ◎ かぐれんぼ
- かくれかこ・かぐれかこ・かこれかこ
かぐれかこ・かぐれかぐこ・かくれくこ
- △ かくれかんこ
- ◇ かくれご・かぐれっこ

10 才 台

30 才 台

50 才 台



共通語形「かくれんぼ」は五十代では全く見あたらず、三十代では一ヶ所（鎌矢岡）十代ではすつと多くなつて約半数に使われている。そして「かくれかんご」「かくれくご」「かくれかご」「かぐれかご」「かごれかご」「かぐれかこ」などは五十代より三十代への二十年間に角田、丸森を中心とする南部地方では徐々に減少している。そして共通語形「かくれんぼ」は三十代から十代にかけて角田、丸森を中心として阿武隈川沿岸一帯の平野部に広がり使われるようになった。北部及び南部の山間部では、どの年代を見ても、また共通語形「かくれんぼ」は使われていない。しかしこれから数年、あるいは十年後には山間部にも共通語形「かくれんぼ」が広められ、方言形は全地域にみられなくなるであろう。

一年 半 沢 聡 子

伊 貝 郡 方 言 地 図

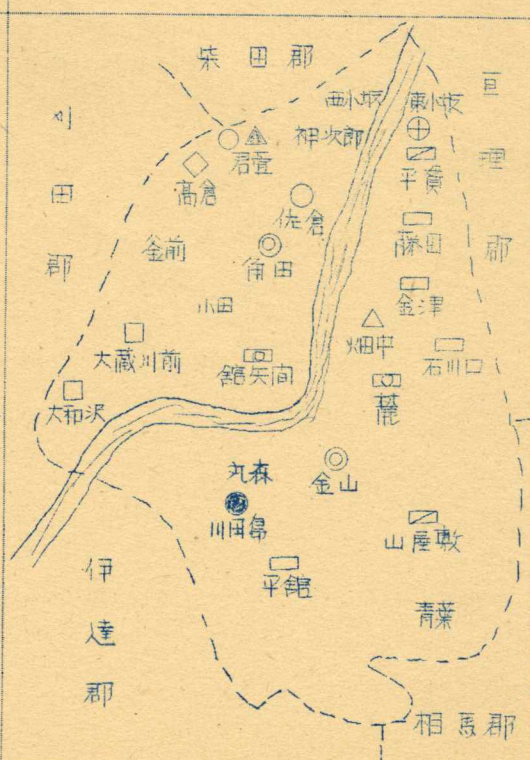
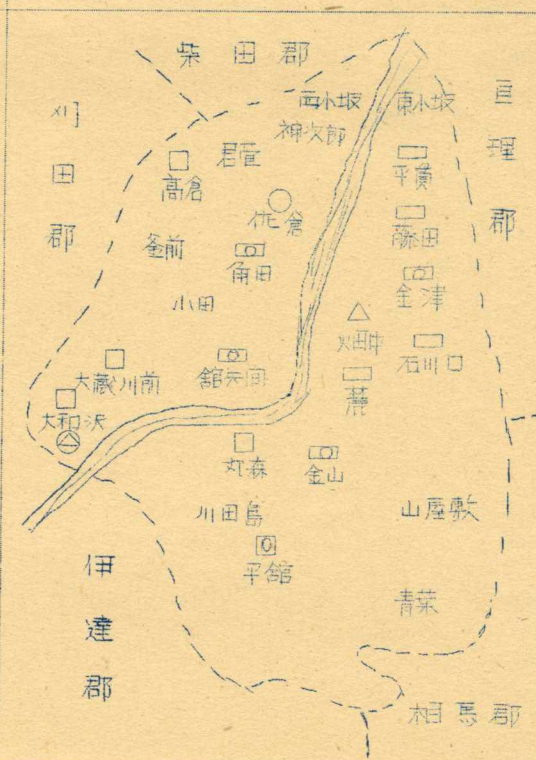
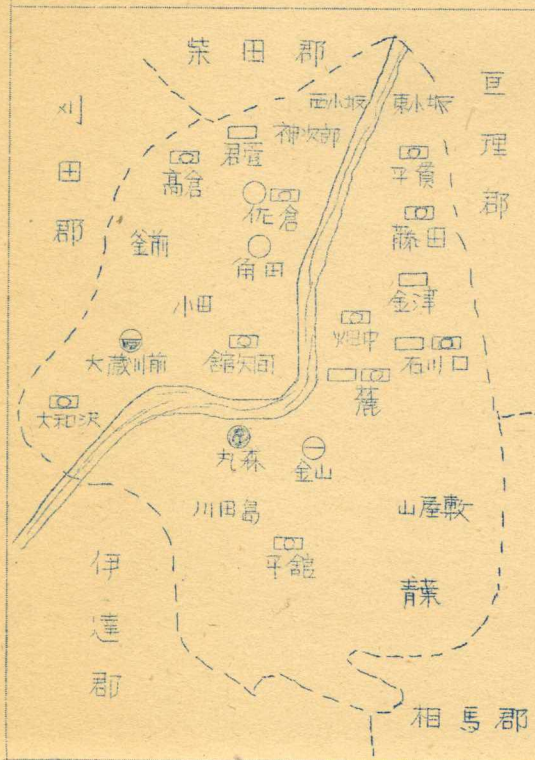
調査項目番号 54 共通語形 ままごと

- 凡 例
- | | |
|--------------------|-----------------|
| □ ままごと | ◎ おもちやこ・おもちやごっこ |
| □ おまうごと・ままだご・まんまだご | △ ごんごもり |
| ◎ お かんた | △ おふるめつこ・おふんめつこ |
| △ おうかかんた | ▲ おしなだす |
| ○ おかか・おかつか・おづっこ | ▨ まうごっこ |
| ⊖ おかかほじ | ⊕ ごもぎり |
| ● かちやんごっこ | ◇ ふぐりくら |

10 才 台

30 才 台

50 才 台



この調査項目全般を一覧すると世項目に比べて方言形が地域毎に異なりその数もこれ又多い。特に十才代に使用した語とそのまゝに近い形を保っている五十代の分布図にみられよう。一般的にまゝとは幼いものや幼い頃に使用する言葉でその子供が生活する範囲も極く限られた狭い地域であるため他の地域より影響をうけたり、変化させることも少ないし、女の子である以上その子供の生活からみて最も関係が深い児童用語の一つであるためかゝることがうなづけるようである。方言形の意味も地方色を子供心に与えたものがその殆んど占めている。(例えば「あかかー」「かちやん」「おもちゃ」「おふろめ」「ぶぐりぐり」「こんごもり」等)。

三十代では幾分それらの名残りが今だにみられるが、十才代にいたっては、「あかー」「かちやん」「おもちゃ」という具體的な普通名詞が使用され、その大部分は共通語形が広められている。これのよつてきたる原因は数々考えられるが、教育程度の進歩に伴ない学校教育の然らしむることがこの原因の大きいファクターであろう。この共通語形にしても南田・丸森一帯を中心に広まっているとがうなづかれる。

鈴木

伊 興 郡 方 言 地 図

調査項目番号 53 共通語形 おにごっこ

凡 例

△ おにごっこ、おぬごっこ

▽ つかみっこ、つかみ(り)

△ おにごと、おにこ、おぬごと

△ おにぐりっこ、おにぐりく

△ はけくく、はけっこ

□ まんまだこ

■ はだじれんこ、はだじっこ、はだじねんこ

△ おしやっこ、おしえっこ

○ ぼつけす

● あっかけ、あっかけく

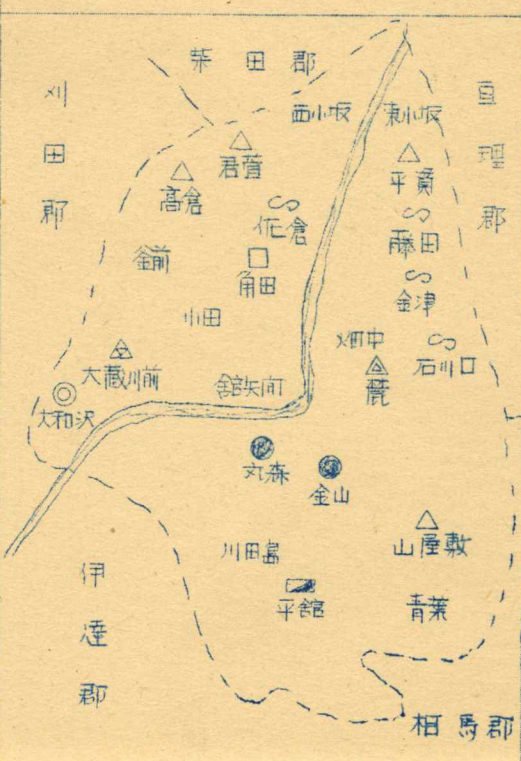
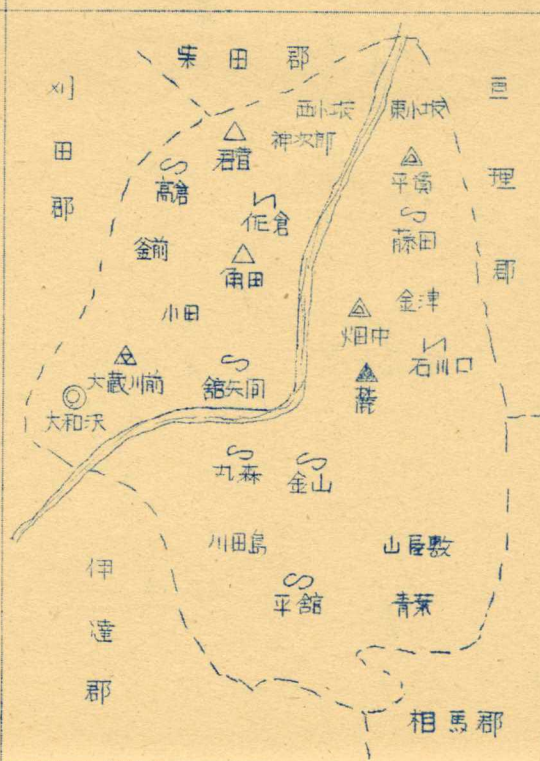
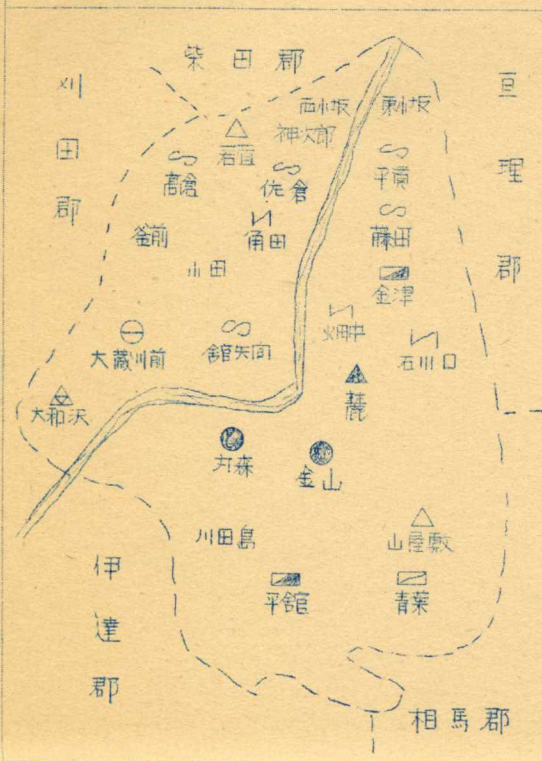
◎ おんどりめ

□ つかみあんぼえ

10 才 台

30 才 台

50 才 台



この調査項目に於ても幼児童用語の一つである関係、生活経験の範囲も
 せまく地域との往來もないので、地域等に、その方言形が異なり、その
 数も極めて多い。それらの方言形の内容も地方色を主かし子供らしい感
 情のこもったものが特にめだつ、例えは「つかみ」「ばげくう」「ぶりっく
 う」「ばっけ」「おしやっこ」「おつかけ」「おんどりめ」「はだじ」等
 五丁、三十、十才代の両り方をみると、幾分、岡田、丸森又その川向等
 の平地では共通語形又はそれに近い語形となつてゐる、しかしそれが変
 化したり他の地域へ影響を及ぼしてゐるとは断定しがたい。むしろ、四
 十年という年月が経ても昔の方言形を殆んどそのまゝ残してゐるとみて
 もよいであろう。

鈴木

伊 貝 郡 方 言 地 図

調査項目番号 55 共通語形 びーだす

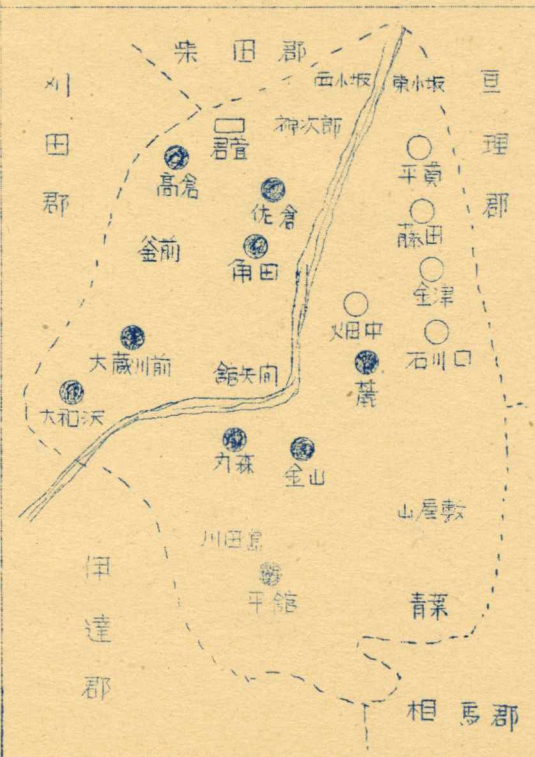
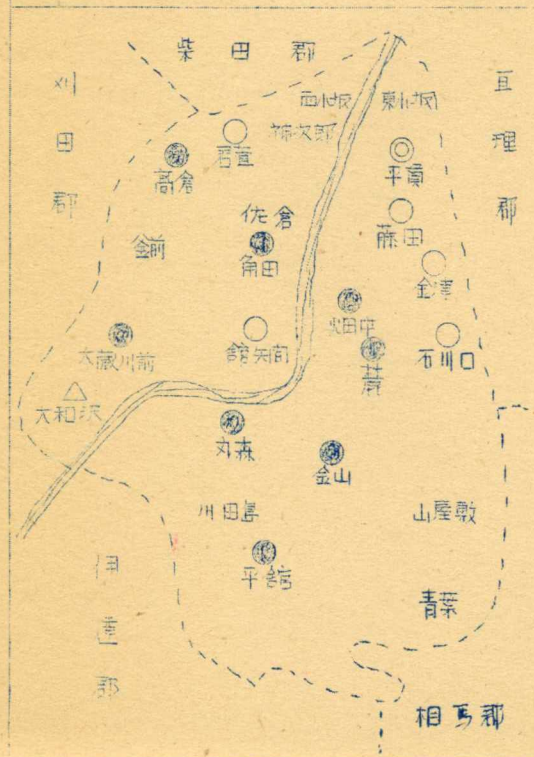
凡例

● びーだす
○ びーだす
△ びーだす
□ びーだす
◎ びーだす

10 才 台

30 才 台

50 才 台





解説

55

びーだま

全般的にみて、中央の川を境として東部は「がうすだま」「がうしをす」といわれ、共通語形は五十代より三十代にかけて、西又は南部へ広がります。三十代より十代にかけて、方言形が後を追って進んでいるかのうに思われよう。

当地方の北部では「たまころ」「めのたま(あそび)」等、子供らしい用語がつかわれているのに気がつく。又大和沢では「びんどろ」と。

鈴木

木

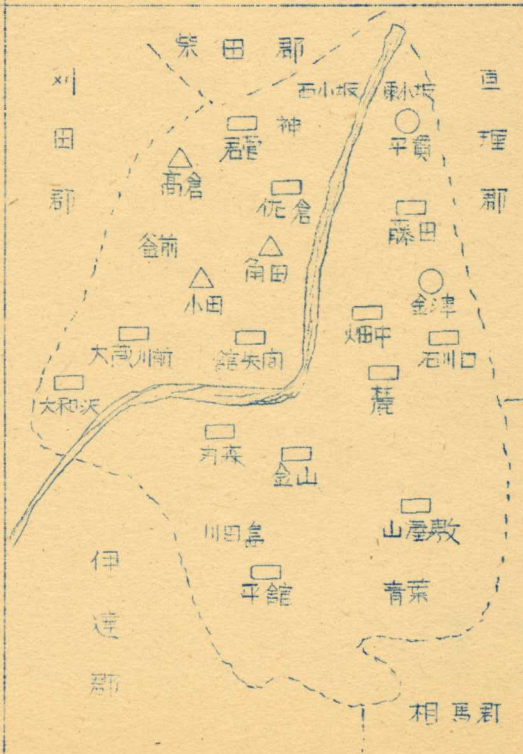
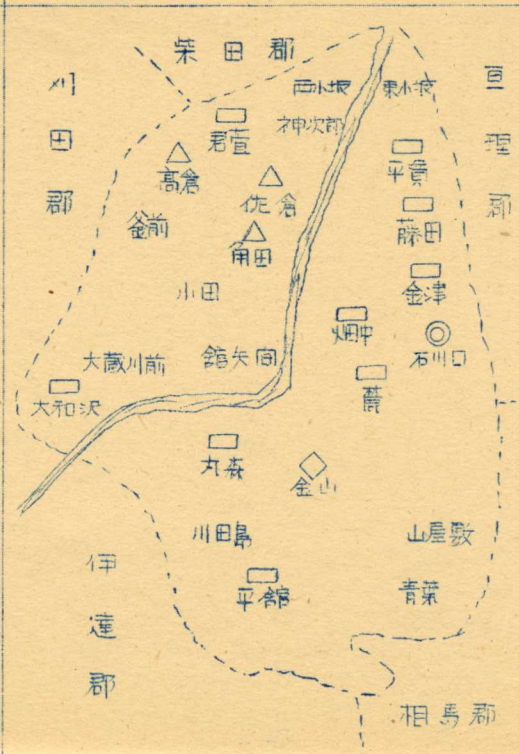
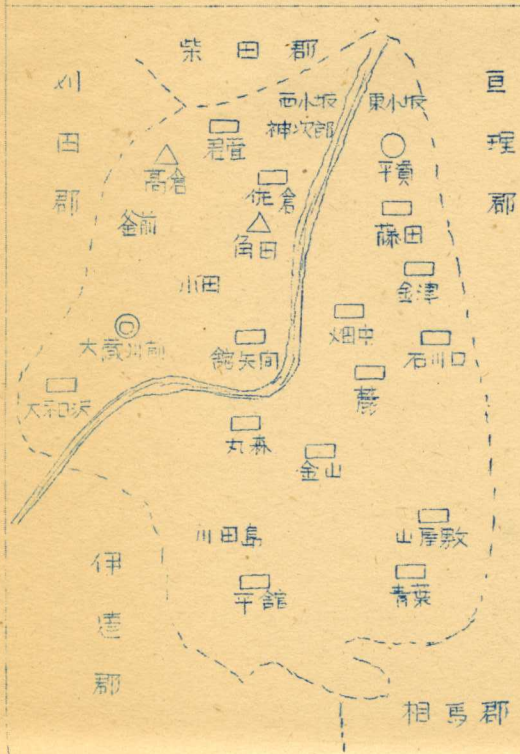
偏田舎杜つまり平野部では五十代、三十代、十代ともに「つぶこ」「つぼこ」といつてあり、山地に入るとまちまちである。大張耕野は、五十代の
大張での「あはづこ」といい、ほかは「びんどう」といつている。丸
森では五十代の人、つまり昔の人が共通語形を使つていて、三十代、十
代の若い人が「つぶこ」といつているが、これは、調査された人が方言
調査のための条件に合つていなかったのではないかと思われる。一般的
には五十代の人も「つぶこ」といつているのだらうと思う。又錦天間で
の三十代の共通語形使用も丸森と同じように考えられる。
高倉の五十、三十代では「せよつぶ」といつているが十代では「しよつ
ぶ」という、どちらも言い方が以ているから「しよつぶ」というのは他
から入ってきたのではなくこれは「せよつぶ」が自然に「しよつぶ」と
変化したのではないかと思われる。

一 年 佐 藤 晶 子

調查項目番号 57 共通語形 あり

□ チヤク・ツァク・クァク
 △ ザ(ツ)ク・ジャ(ツ)ク
 ○ スナダマ
 ◎ オテダマ
 ◇ オタマジヤクシ

50 才 台



歴史的に全体を通じて考えたと五十代の平廣や金津では「スナダマ」と言われているが、これは昔、アズキがもつたいないので砂を入れて作ったからだと考えられる。そのスナを入れたお手玉をする時「チヤクチヤク」といつ音がするので、自然と高倉などでは「チヤク」となり、それが発音の遠いから、角田で言われている「ザツク」に變化したのだと思われる。又川を堺とする山向部では「チヤク」「ツアク」と言われ、平野部では「ザツク」「ジャツク」などと言われている。五十代三十代を比較すると角田付近はあまり変化していないが川向いの平廣、金津、石川口などは変化している。石川口では「お手玉」というように一つだけ共通語が使われているが、はたしてそのとおり部落の三十代の人達全部が使っているかいないか、又どんな所から共通語になったのかは、これだけではちよつと知りがたい。又金山では「オタマジャクシ」と記されているが、これは調査上の誤まりとしか考えられない。十代も同じ様に角田丸森を中心として、あまり変化してない。

全体を通じて見てわかるように数が一定しないので、多岐にわたり、変化がなく、十代になつても共通語が入っていない。これはなぜだろうか？、交際範囲の広い大人の使う物であるならば、ただちに變化するであろうが、お手玉は子供の使用するものであり、子供は交際範囲が狭いので変化しないということから、共通語がながが入つて来ないのだと思われる。

十代で一つだけ大蔵川前が共通語になつていて注目されるが、この部落の皆んなが「オテダマ」と言っているとするならば、何年か後には共通語もだんだんふえてくるであろう。

図例

伊 興 郡 方 言 地 図

調査項目番号 58 共通語形 たこ

□ たこ

☒ たこ

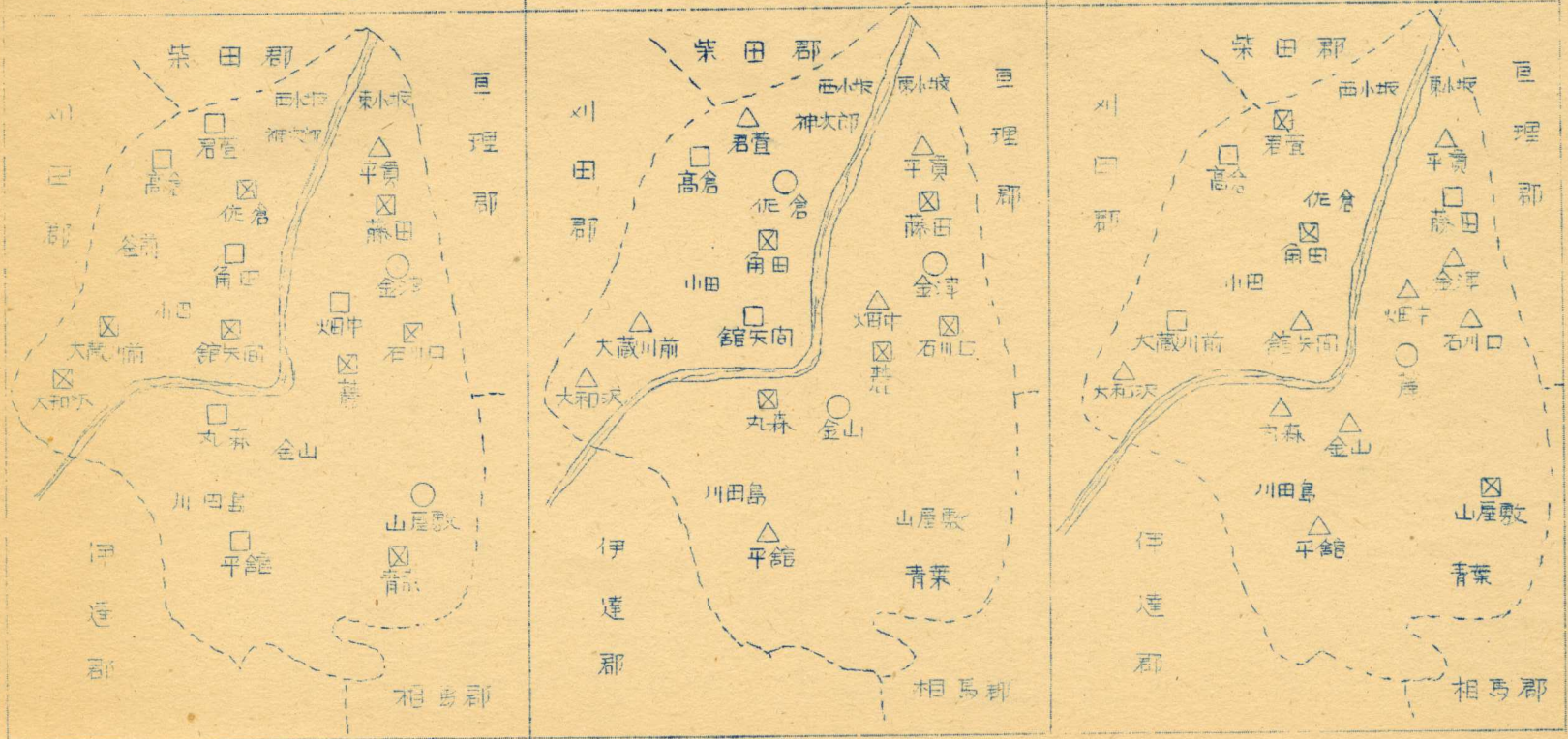
△ てんげだ・てんがだ

○ たこてんげだ

10 才 台

30 才 台

50 才 台



解説

4058

たこ

山間部の言葉が平地の言葉の影響を受けて減少してゆく現象がこの項目の分布にも云いうるとするならば、五十年代の分布図によりそれ以前は共通語形又はそれに近い語がつまり「たこ」「たご」が平地一帯よりその周囲の山間部にかけて話されていたのであろう。それが、何かの動機で方言形「てんばた」「てんがた」又は二重用語として「たこてんばた」が用いられるようになった。しかして三十代に経過するまで周囲へ広まっていたようだが、そこに又新語として以前使用していた共通語形が現われ、十代にはいたつては阿武隈川の東部を残して伊具地帯一帯に広まっている。

鈴木

カ、
もすび

前項の分布図及びそれの解説をみれば、それの概要を理解できるとしても、各々の因連、その傾向、又、言語上として共通語と方言との関係、ひいてはそれらの地理的・文化的・地域社会的意義を把握するには困難を感ずるところであろう。従つて、当友の会員のもつて、話し合つたものを一応まとめ、それらの理解するため橋渡としてまとめてみる。

「文化の発生地は古より河川のあるところ」とは、よく耳にし、誰しも否定しえないところである。古来交通機關、通信等の未発達な時代は、地域との交流は殆んどなく、孤立封鎖の状態であつた。そのため、地域文化との比較もできないところから、飛躍的な進歩も望めなかつたろうし、そこで水上運搬、水上交通によつて、細々ながら果してゐたにすぎなかつたであらう。当地域においても、言葉の発生又音韻的地域的変化、その増減という言語的立場より見て、一部の例外はあるとしても、伊興地方を南北に縦断している阿武隈川の存在は決して無視できないだろうという推測に出発し、実証することゝできた。特に大正十五年発行の伊興郡教育会編の伊興郡誌によつても肯定されることである。この郡の中央部は古来河水の汎溢により、田圃の山村を除く外は、濕潤の地で、各所に沼湖あり、江水を湛えて居たので、石川氏以前の本郡交通の要路は難路であり、不便極まるものであつた。初代石川氏時代に道路政策が確立して始めて、南田より槻木へ白石へ中村へ直理へ筆雨より伊達郡へと交通が開けた。その多くは水路を利用して、大阿武隈川の上下する船舶による運輸であつた」と交通の容易ならざること指摘、その代償利用として阿武隈川をあげ、更に次の伝説民謡を讀むことができた。

あれ流れは何処の舟　あれは南田の土産船　南田の土産に何に貰つた　一分符　二分目の雪太　三分酒の帯もうちつた　帯に短かし襷に長い　天旗入幡鐘の愿　鐘を叩いて長看と

ならば　南鍛冶町みる長看ノ

と南田の土産は土産船にうつて阿武隈川を下つて荒浜に出、奥山堀を棹して仙石に歸つた。当時の水利大阿武隈川の盛況と南田三万石の城下の殷賑はこの郷土に残る一篇の俗民謡手まり歌を出して想像される。

川底の浅くならぬ、勢なくとも明治二十年頃川蒸汽船で荒浜堀釜からこの町へ上下し、鉄道が布設されるまで、朝夕へに大小の帆前伝馬船の幾十艘が往來してゐたことは文化的にみて、悪條件の当地方には水利の天恵そのものであつた。

以上歴史的にみても角田、丸森は当地方の地理的中心地であると共に文化の中心地でもあつた。かくて前項目の地方言の分布図及各の解説でもつて肯定できる如く確かに新語共通語もその下流より伝わり当地方の中地角田、丸森から種々変化、移動しその周辺にそれらの語形が伝わったことは事實であらう。だが下流より直接角田、丸森へ入ったものか、或はそれまでのある土地へ渡りそれが若干の变化をうけながら角田、丸森へ入つたものかは疑問だと云々ざるを得ない。とにかく角田、丸森及びその周辺より四方へ移つて行つたことは否定できない事實である。したかつて西部の山向部、南部の福島との境をなす山向部、又東部の亘理郡との境をなす山向に以前使用された語形がその若干の变化をうけながらも今日にもその名残りをとどめてゐる。

かくて、言語はこの阿武隈川の恩恵をうけ更に角田、丸森の二地を中心として周囲へ広がつていつたことは事實だが、それが如何なる原因でどのような変化の過程を経て広がつたかは残念ながら究明できかねたが、どの方向へどの程度まで広がつて行つたかは凡そ次の如く結論づけられてゐる。尚年令的に使用する言葉が固まるのは十五、六才より二十才前後といわれているので、今日の五十才代又三十才代の人が十代で話されてゐた言葉を各々四十年又二十年経過しても変えずに今日も話してゐるという仮設に基いてゐることを前もつておことわりしておかなければならない。

(一) 時代の差はあるとしても共通語形が当伊貝地域全般又はその大半に使われていた。しかしながら当地方を南北に流れてゐる阿武隈川づたいにそれとは異なつた方言形とみられる語が一応角田、丸森一帯に入り、こゝを中心として周囲へ広まり、以前使用してゐた言葉を喪へたものの以前の共通語形勢力におされ、現在の十代の子供には全くその姿を消してゐるものがみられる。例えば「¹⁶⁶ひじ」「¹⁶⁶ごげくさい」「¹⁶⁶おはじま」等

(二) 又反対の現象としてみられるものとして「¹⁶²うし」において、川沿いに共通語形が五十才代より三十才代にかけて角田、丸森一帯に入つたと思われるが、その周囲の方言形の勢力におされ消滅をおこしてゐる。

(三) 更にこのようにして入つた共通語形が消滅の傾向にあるのではなく、逆にその方向や移動の範囲は一定してゐないが以前の方言形を变化させるか、又移動させてゐるかしてゐるものがある。例えば「¹⁶⁴あご」は佐倉附近より南の方へ「¹⁶²ちよう」は北面部や、南東部の二つの方向へ「¹⁶²かまきり」は「¹⁶⁴かくれんぼ」はその周囲へ各々影響を及ぼしてゐる。

(四) 又「蛙」のように共通語形が丸森、角田を中心に発生してもその周囲の影響がみられるわけではなく、四十年前以前の分布をそのまゝ十代の子らにも殆んど喪えずに残しているものもある。

(五) 又時代的に影響や移動する時期のちがうものもある。例えば「うらがえし」では五十年代より二十年代までの二十一年間に丸森に入つた語が東部へ移動、その間角田周辺の同じ共通語が北上したようである。これが三十才代より十才代の二十一年間に着しくのび、更に方向を東へ喪へ移動したようである。それらが、南より北より角田の川向い全津、藤尾附近で合流しているように思われる。従つて川向いの地帯への角田からの直接の影響は多少はあつたとしても殆んど感じられない位のものである。マ同様なことが「じやがいも」にもみられる。

(六) 角田に「たみ」にみられるのだが、やはり以前は当地域全般に共通語形が話されていたのであろうが、川沿いに方言形が入り以前話されていた共通語形を山間部へおしのけ方言形が一定の範囲まで(特に平野部一帯に)広まつた頃に又その内部で以前話されていた共通語形が新語として誕生し、その周囲の方言形を喪えようとする収斂的な喪り方をしているものもある。

(七) 以上のように喪化、移動しやすい語に対して「ひまがえる」⁶⁶⁵³ おにごっこ⁶⁶⁵⁴ ままごと⁶⁶⁵⁵ お手玉⁶⁶⁵⁶ のように四十年前の言葉を喪化も移動も殆んどなく、当地域からの多少の影響はあるとしても、ほ昔の姿をそのまゝ残しているものもある。

特にこれらは幼児童の使用する語彙に、このような現象がみられる。しかし、このような語は地域毎に云い方は全く異なり、その種類の数も極めて多いことに気がつく。以上当地域として共通語に對する方言に關するものをみてきたが、尚この際一般的傾向として次の如き言語現象が感じとられる。

(一) 言葉は文化の高いところから低い方へ流れゆく。

(二) 文化の高いところはその語を何時までも使用しているわけではなく、他地域の一一般的に文化の低いところへ移動させながらも次から次へと新しい語を生み出してゐる。

(三) その移動は例外的なキヤンスがあつて急喪化、又すつかり置換される場合は別として一般的にみて長い年月(凡そ最低二十年)を要し波動的に之がつまゆく。

(四) 同じ内容の意味をもつ語は一つとは限らず、多いのになると当地方の調査にすれば十種余りになるものもある。それだけの原因、條件は完全に究明されてはいないが、その輕重の差が認められ

十 評語へ加藤正信先生へ

用法上優勢と劣勢な語とがある。その劣勢な語はその地域内で消滅か或は辺界な文化度の低い地方へ移動するとして、新語として優勢な語が出現、その周辺へ広まつてゆく。

(木) 優勢な語は共通語だけとは限らず、方言が優勢で共通語を消滅させることもある。

(イ) 同一内容の幾つかの言葉は今用使用されていなくても以前使用されていた言葉の上に新語が現われることが次々起り、地層の如く堆積されている。

(ロ) 交通不便という地理的條件で往來の少ない山間部には今日に至つても何らの変化も受けず昔のままの形をそのまま保存している。

(ハ) 交通不便でないところでも他地域との交渉を必要としない語特に幼児童の使用する語は昔の言葉とそのまゝ保存し、その数も極めて多い。

以上当調査研究での結論めいたものを纏めてみたもののこれらは伊具郡内だけを対象したるものであつて、隣接地域との関連を無視できない状況から郡外の実態を調べるならば、郡内の実態は明瞭且正確なると共に、以上の内容も受つてくるだろうことは否定できないものであることを最後にことわつておきたい。

方言は日常目に触れ、口にしていてるので、その変つた言葉などは私たちの興味をひきやすいのですが、さて、實際にそれを科学的に研究するとなるとなかなかむずかしいものです。ある地方に住んでいる篤志家がその地方の方言の単語を集めて、そのアイウエオ順の辞引をつくるということも大変な仕事で、しかもまた貴重な作品です。しかし、それは英和辞典などとは異つて、辞書としての利用価値という点では全く話しになりませんし、また学問的かという点と必ずしもそうではなく、ただ古い方言を拾つて集めて並べただけで満足しているということが多かつたようです。

今回、角田女子高郵便友の会の皆さんのおやりになつたことは、老人だけの言葉をという従来の方言研究とは異なり、自分達の生活にすぐでつながる生きている方言の分布の実態を科学的、近代的な方法で綿密に調査研究された点で画期的なものと思います。このような研究はますます宮城県ではなされていき、皆さんがその始めと言えましょう。現在、国立国語研究所で日本言語地図の作成のため、全国の方言の分布を最密な方法で調査していますが、その地味は各郡二、三の地味ぐらい

伊具郡では金山の一地矣だけして、どうして皆さんのように細かい地史の差を明らかにし得ないでしょう。

近代的な大規模な調査では個人の力に限界があるので、どうしても組織の力による共同調査ということになりす。その際は単に学問的な能力ということよりも、チームワーク、人の和ということが大きな問題になることと思います。鈴木先生の御指導のもとに、個人の功名を捨てて歯車の一つになつて調査の準備のある部分を責任をもつて分担し、また炎天の山野を女性の身で駆けめくり、最後に部厚の資料を整理して言語地図を書き、それについての自分達の考えなり意見なりをまとめたことは心から敬服いたしてあります。これが高校生の仕事かと目を見はる実に立派な良心的なもので、専向の学界でも太い利用される価値のあるものと信じます。私も実はこのような調査をしたいものなとかねがね机上で空想していたところなのでした。その実行可能であるとの証據を皆さんから示していただき、非常に勇気づけられたようなわけです。今後、まだ、郡内の調査地を細かくして行くとか、郡外とも比較して伊具郡の特徴を明らかにするとか、自分の進歩に従つて同じ資料でも解釈のしかたを改善して行くとかいうことも残されているかと思ひますので、皆さんの一層の御努力を祈つております。

今回これをまとめられたことは、友の会の皆さんが自分達の共同の仕事の輝かしい記念塔として卒業後にも思い出となつて自分をほめますだけでなく、地域社会の人々に方言についての自覚を促し言葉を大切にし御土を愛する心をこの土地に植えつけることになると思ひます。

二月二十二日

附記（雜感）

当研究の最大の困難處は伊具郡の最も身近かに感じている言葉とはいへ如何なる言葉つまり方言形を、如何なる立場より如何なる方法ですゝめてゆくかであつた。勿論、伊具郡の地理的、歴史的地域社会的にその実態の何ものかを知らず行かうのであるからこれ程危険極まることにはないであらうし、かゝるに本校校長、高梨先生、東北大学院文学研究科且本校講師宮川康雄先生の全面的な御協力により出發したこと、思い出すも心強いものであつたことは疑い得ない。

更に宮川先生の御協力により同科のこの方面を直接擔當してあられる加藤正信先生の直接、間接に

かゝわらず献身的に我々友の会員に御指導を最後まで賜つたことはこれまた感謝の一言の他は無いところである。

しかるに、かゝる座にして入なる研究課題に比べ言語学的にも、その他についても全くの未経験且未熟なものがこれを成し遂げたとしてもその結果は甚だ身のちがふと思いがするのには当然であらうが、精々綿密な而も着実な討究のもとに正確な調査方法によりこれを實施し、我々の果せる忍耐強さを以つて専心努力した次である。然しながら、これらの過程、方法、結果に於て不備にして不満な箇所の数多きことはやがめない事実であるが、かゝる其後に課せられた問題であることは、ことやつておきたい。特に心残りのする問題は郡外の周辺の地域の調査であつて、これを實施すればこそ郡内のことが明瞭に結果づけられたことであらうということである。

さて本校生徒諸子に対しては今迄生活の中に溶け社会生活上切つても取りはなせない言葉、特に方言を無意識に使つていたが、この調査研究により方言の生能を再認識し共通語標準語との差違より地方言の存在意義を知ると共に今後の我々が実社会を送るに当り科学的な眼をもつことに当調査の意義があるのである故。当調査を直接参加し或はこれを熟読することによりその一担を果せたとするなら、これに過ぐるものはないのである。果せるなら、どうか、当地方の研究したことを充分活用利用していただきたいと思ふ。

尚この調査には三十有余名の南田女子高郵便友の会の皆さんが精神誠意、思い出せば本校休法室で夕方遅くまで、日曜日返上して登校、夏の暑い炎天下、自転車で又は徒歩で何里もの道を歩き廻り被調査者を求めるために更に歩き続ける等数限りないものか思い出される。古人の言葉に「石の上にも三年」なんて目にするが一つの筆を完成させるには三年は愚か十年二十年三十年もかかるものであらう。この覚悟をもつてすれば如何なる障礙をも乗り越えられるものである。しかしそこには血と汗を排わなければならないことは申すまでもないが、今後の一層の諸子の健斗を念じまします。

最後に当地域の実態の把握等に本校職員・氏家均事務長と、同職員渡辺房男先生の印刷等の御協力に感謝申し上げます。

22/77

4N-087
(N11)
Ka 28
宮 2A

国立国語研究所

3

8

7

466